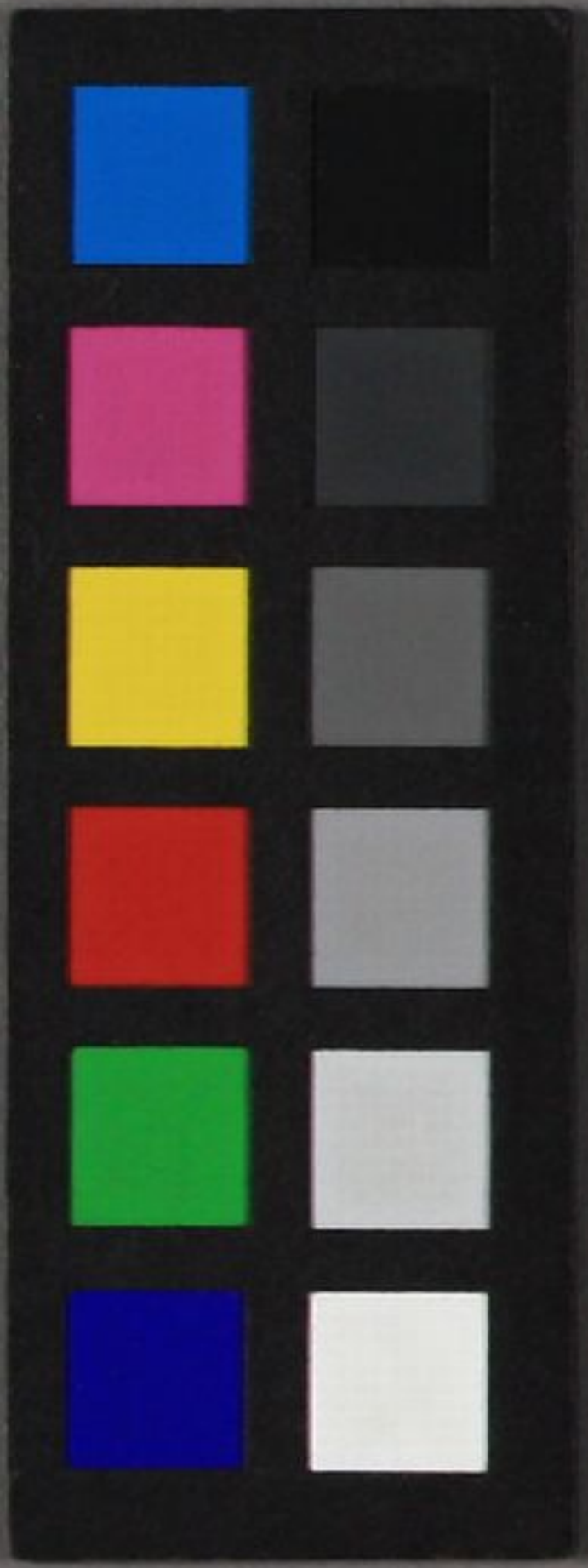


俵 啓一 系集

三

中村俊定文庫  
文庫 18  
817  
3





俳諧一葉集附合之



古學庵佛号

幻窓 湖中

坎窩 久藏 校



元禄二毛巳

此翁翁よりいふはまゝの山王の事外  
 吹河けつりし喜の雪 花 嵐雪  
 物も鴨帰るぬ野のさへて  
 七輝 山を如くさるる 月 霜  
 河造り架の建より砂とけけ  
 家系とほくふりつるの血 雪

玉照白

坊主と云ふもいふは進之出  
 土の餅つく神事おそろし  
 生簀子燃付く市も多  
 り管も疎く和りきりうけ  
 吉白丸境あふ食とつふむけ  
 糸くもく島をよこす眼糸  
 舌根千念佛を修む居士衣  
 小珠ハ綿の中には何れも  
 杖を折せ路々破上りあり  
 膝行不佞や姨控の月  
 交切手垣根代うら嵐衣  
 頂冷せもふ箱の下ーき

翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁

名の長と弟子の尺達をまき  
 川の底のうつ桶の名を取  
 柴垣の古木折ハ破まきり  
 後とまんじり控はくろみし  
 季ノ末のこのひしを秋の風  
 髪きる音は月了ひのめく  
 長門より西の嶽は根回し  
 粥子ノ玉子を何と喰らん  
 山登むの傍を多他折棧  
 ちりし藪をくノ費り  
 やくせん大江の岸ハ八折屋  
 削屋し以て杖箱の蓋

翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁

伊謀及とたの酒のぬきの酒  
直舂の枝子神と置く  
花くまの能子物るさふ  
注こみ (と) 田部 波二喜

翁 聖 翁 聖

陽炎の香扇子につれなき  
水初より千のけしき  
松のたまり物法のゆき物あつ  
あまうりそふ手様ゆき  
こころをかくり物にまらぬ

翁  
曾良  
塔山  
此筋  
良  
翁

萩原ハカシマのゆき  
納子くまの物供のねり  
玉内中し小神のゆき  
あつたてふ人さす物さし  
ほそくさすゆきのやさしき  
雪をそらすに火焼ぬき  
幸よまひくまの待たぬ  
物のきまをさす吹き  
桐の葉くまのけの家  
松の葉くまのけの家  
浪ハカシマの宿古を物す

翁 山 良 翁 山 良 翁 山 良 翁 山 良 翁

二  
 家崎くはりまゝに此鳥城餘  
 丸くおろしあらのむらさ  
 城の跡をくたし善哉く  
 ねき了火成吹待はく、妻  
 り之へ連ひ子ゆく星内歌  
 阻くころをは嘉勢あつり  
 山ゆきまひく暮の露の録  
 尾木あましく音うけの小丘  
 作、娘とあまやまをむ物さ  
 喉の百合子流りけは  
 狼のあまのむらたの月  
 くの窟子佛つらうた

山 麓竹 葉 山 良 山 葉 山 良 山

三  
 妻とがう流石の酒場のあまを  
 城の唄くまの舞のあま物  
 河原う人の流石とあまをさけ  
 橋うたれハ鞠の流石  
 一門の花火あまをさけく  
 流くまのあまをさけく

竹 麓 山 葉 良 山

歌以倉瀬翠柳亭  
 穂ゆふ人をたぬあまをさけ  
 まふいらくまをさけく  
 折ゆふ市の仮面をさけく  
 町の中ゆく川さの月

翠柳 曾良 山

藤のふもとのけしきくは  
 藤のふもとのけしきくは  
 藤のふもとのけしきくは  
 藤のふもとのけしきくは  
 藤のふもとのけしきくは  
 藤のふもとのけしきくは  
 藤のふもとのけしきくは  
 藤のふもとのけしきくは

藤 良 藤 良 藤 良 藤 良 藤 良  
 藤 良 藤 良 藤 良 藤 良 藤 良

藤のふもとのけしきくは  
 藤のふもとのけしきくは  
 藤のふもとのけしきくは  
 藤のふもとのけしきくは  
 藤のふもとのけしきくは  
 藤のふもとのけしきくは  
 藤のふもとのけしきくは  
 藤のふもとのけしきくは

藤 良 藤 良 藤 良 藤 良 藤 良  
 藤 良 藤 良 藤 良 藤 良 藤 良

昔の紫八輪の流や波はつらん  
 舟を味と 休人 紫うら  
 舟も又おのをもあむ石の上  
 舟付くさくさく出のすく 舟  
 真すちと舟をつくくし 杜宇  
 かたはけすの矢と 投る 丸葉  
 花のたの波をさきぬ 波をこ  
 始さくくといふく 火煙をすい  
 一葉  
 くらも又おのをもあむ石の上  
 米とふらうけに 波のきく浪  
 旗のよみおこしうらくし 旗  
 翁 里 翁 良 梅 柳 雪 撰 筆  
 翁 二寸 曾良

かくの風好まし物なりさうく  
 吹く 一ふり脚を花とるをく  
 跡生くれくすまのつこすり  
 翅輪 秋鴉 柳里

四月廿二日

風流のけめわかくの回極歌  
 舟多子をちかてあまけり  
 水と記して屋宿の石やまきしん  
 藤子 藤のあういらすり  
 一葉 一く月とさきふ川柳  
 舟に上り根ふく村を 秋葉  
 舟の女、上総と舟佛のまを酌て  
 翁 良 躬 翁 曾良

女成くものーやとほむ物  
 あり時ハ増えもい方の入ぬくむ  
 梓の小枝子、をを摘と  
 うみてハ嫁、島の名を悟し  
 雲降一山や白雲おとけ  
 酒より八軍を送り、算と来こ  
 秋を去り、夕と物とくし、信  
 文の秋の聲つと不破、麻の角  
 多田のお伽の位ふせつ、月  
 いろくしの形をせと、籠りあて  
 山一き骨をけふく系遊  
 山多死尾、をく手やむあうい

翁良船翁良船翁良船翁良船翁良船

芥塚とくう、信あつめ、女  
 新いく雪舟一筋の法ありて  
 柳のく、式舟のあき、島  
 華とく、ぬまのあき、舎に  
 字より百経、く、あき、つ、し  
 多杖子、わろ、あ、入て  
 何中、事、れた、ぬ、七、又  
 任多、る、布、の、ね、れ、月、を、見、よ  
 す、き、希、く、む、と、あ、の、ぬ  
 切、櫓、枝、く、き、に、き、し  
 左、山、鶴、の、あ、き、き、き、き、き  
 山、や、湯、を、き、き、き、き、き

翁良船翁良船翁良船翁良船翁良船



穀生石花... 酒の中... 六十の... 春陽...  
良翁 良翁

業門可伸の... 七...

から... ず... き... 畔...  
栗廬 等翁 曾良

把... 秋... 梓... 穀... 松... 海... 聲... され... 月... 智... 望...  
等雲 次字 素景 翁 富 翁 良 翁 竿 寺 良 翁 葉 翁 翁 翁 翁

梅子おろし秋夜やよみおの付  
かきかゝる苦み証被あし  
まはるにまをさしきりまのあ  
まゆるとれぬ思致さくき  
まの解成ひゆきまの美しく  
かゝるしきりまの縁や言しく  
くもわの言をくくくお沙おの平  
杯をくくく市北酒酔  
け信り三社の託をくくくや  
けく合申しは時あゆみの  
ゆきあるまの酔の甜もさく  
四五の月をくくく海士の家

富 船 葉 良 雪 富 菊 竿 形 葉 良 菊

あゝあゝかゝるまのむし  
麻の言 院さましくきぬ  
冠をも言すはくくくは志  
くくくくくくくくくくく  
急されハ言りくくく人あく心人  
言もせれさけし思ふ故の花  
入にハ四門平法の花の山  
こきもさくくくくくくく

雪 良 菊 葉 菊 菊 良 雪

お尋の家たさくくく破故帳  
くくくくくくくくくく

風流  
菊

菊他遊子花を折るくさ  
 芳まのくさ 虹のたき  
 そろろの月を二重に照らす  
 了市くはく物志のきむ  
 棋けく祖父のろをを修へ  
 早くくろみくおをさるめ  
 梅うさうみきこやき瓶子  
 すくれをゆけく通すこも  
 三歌くろ言子古の思くれ了  
 波のききく 高の暮 系  
 雪くぬ松のけの船く  
 蘇子みきけくおのくくあ

孤松 菅良 柀風 熟華 侖 良 柀 如柀 木端 翁 松

け道くぬを燈の少社く  
 病ゆくくむとあそくく  
 友花のけハ衣をををを  
 羽をきゆの尾おお石  
 ぶのくみと夢を扱きく喜の水  
 ちくくあやをくく長をさくやき  
 袖を極くくくくくくく  
 牡丹の香風あめくく  
 老僧のけく小をけくめん  
 武士くく入東西の門  
 羽のつくくあくくくくく  
 羽織くくくくく 袴の月

松 翁 良 法 柀 風 柀 良 翁 松

秋文々於子子からん若の意  
 うさひさしりきくみ徳の谷組  
 鳥敷やあを尋るる久百音  
 出珠の紙より尺ゆりか守火  
 なる紙沸の音と珠よりて  
 よろ結て空ふ紗魚の白張  
 ぼろくしし石のうららの崩れ  
 ちくさる山もあのはれし  
 ぼろくちをたつと細あて  
 黄きくさひぬ蝶さふふ

秋 風 端 翁 依 依 依 依 依 依 依 依

清くは秋家たよいで解きし  
 考のぬきくそのたきと焚  
 庵子と尾上の清も回しけり  
 夕月あらしのたのたの  
 桶あ茶人うけたりぬ茶の音  
 静のつれ来るつらし  
 みるける石の子のしははま  
 山は鳥のたてまきり血をぬ  
 又のうきやまや後母の依り  
 秋田酒田の浪まきりき  
 るともむし舞の小かたやあし  
 素くよ虫の雷きり

清風 管良 素英 風流 翁 依 依 依 依 依 依 依 依

ふ 穂 手 美 人 の か げ ら 善 人 へ  
雲 せ の り ら け ら せ 誓 心 願 一  
八 月 や 申 酉 の 方 折 々 々 々  
戸 を 破 け 破 け 破 け 破 け  
干 船 の 舟 へ 入 入 入 入 入  
七 手 の 舟 へ 舟 舟 舟 舟 舟  
燈 籠 した 燈 籠 した 燈 籠 した  
火 串 之 火 串 之 火 串 之 火 串 之  
扇 子 一 枚 一 枚 一 枚 一 枚 一 枚  
ゆ け け け け け け け け け け  
と 舟 へ 舟 へ 舟 へ 舟 へ 舟 へ  
船 へ 舟 へ 舟 へ 舟 へ 舟 へ

良 風 菊 英 良 風 菊 英 良 風 菊 英

物 手 美 人 の か げ ら 善 人 へ  
雲 せ の り ら け ら せ 誓 心 願 一  
八 月 や 申 酉 の 方 折 々 々 々  
戸 を 破 け 破 け 破 け 破 け  
干 船 の 舟 へ 入 入 入 入 入  
七 手 の 舟 へ 舟 舟 舟 舟 舟  
燈 籠 した 燈 籠 した 燈 籠 した  
火 串 之 火 串 之 火 串 之 火 串 之  
扇 子 一 枚 一 枚 一 枚 一 枚 一 枚  
ゆ け け け け け け け け け け  
と 舟 へ 舟 へ 舟 へ 舟 へ 舟 へ  
船 へ 舟 へ 舟 へ 舟 へ 舟 へ

英 風 良 菊 英 風 良 菊 英 風 良 菊 英



多敷しやる内十五款  
金利珍ふはねの秋の以千僧  
板魚了三の棒の木  
つくしとせさうに支あて  
父の旅宿を住りしす  
こころを風の海にかゆ星  
くまもま浮り上る石上  
ゆきひらの雪千折る山より  
海よりうしろしみのりかみ  
はるふ橋等く猿まき子ん  
くまのまもくおねの家の  
花とよめおきさの種持る

英篇 風英 良篇 風良 英篇 風英 良篇 風英

多の甜わしりしちの山也

篇

一葉亭集行

さみしれも集りし涼も川  
岸より雪もはななく舟祝  
瓜とけいさうあやう氣をらて  
早もをわりのひり葉の細花  
牛の子子ころる鹿のひり香  
雨もやわしし懐の吟  
袋もを枕りやうららるし  
松路ひそく玉井境目  
永まお古ふ寺のいさき

篇 一葉 曾良 川水 葉 水 良 篇

芳とゆひする大いもの此 状  
 葉の名をこめつはむをかちらへら  
 瓜紅うつる双ふの 石  
 を揚るすれは火のくひ入て  
 杉ふ人子告る 秋 うちを  
 多留る舟の月ころる 音おれ  
 破くしとくえくしてむさく  
 花のほちを織する 是れら  
 望繁いとあま玉山うけの塔  
 珠多村を浮舟のふの喜富く  
 刀持する甲斐の 一 札  
 藤垣人も通る ぬ 罪 不し

水 良 菊 水 茶 良 水 菊 水 良 茶

物さくくひ子削る松の木  
 早あつる梨ハ白髪こかす中を  
 集りて遊女のたをともむ月  
 葉の浦を夢ふも想ひぬるに結  
 葉くをりぬるをたけさする  
 合歌吹本つけを屋のかけら  
 多ししあす万りの 証  
 古の友をたけをふくさる  
 空葉 編する舟の葉合  
 重みそれ沙是の市の名話とし  
 蝶 拂のりを 夢 院の 窓  
 元人も古や懐紙かきくとも

茶 菊 良 水 良 菊 水 茶 菊 良 茶



やま久鳥のまうふ入お  
ひつてと聖とこくくおの  
山田の移をいそよおく南  
良卷水

羽尾山舎受河関梨のふ院有善お成え  
有るやををめくすれ少言  
任作と人の移とま  
川舟の強り寄をく引ま  
野の飛取とす足ゆる三有  
澄る年天もくくす秋のこれ  
おもあまは結くち  
候くそハ登のかけ守くは段  
梨水 味妙 珀雪 膏良 露丸  
雪

百里世旅を木まの牛追  
山居す心く珠の能をま  
岑おすく心林木の森  
高よみの能志く山の家ま  
豆くくぬ衣ハ何と怪鬼  
古師おを寄り寄り松皮膏  
多き之枝さかんくの歌  
月尺くく引起されて脚き  
望所さくすくすすの  
中川くく大のかすく節お  
的場の事くく吹くく力石  
まを強くく七のくく力石  
霜 雪 丸 霜 良 水 霜 丸 雪 良 丸 霜

級といたく醒る舟の  
 足成のこころをいふる美  
 敵の門を二夜も宿りし  
 かた清の岸を沖舟の地氣し  
 藁を中より可山をのち  
 舟の空ハ楢の枯木の上をく  
 湯のまをくくくくくく  
 龍のこころを枯木の上をく  
 藤をまをくくくくくく  
 月山の嵐の風を骨子志む  
 海浜の大孤を編纂の影  
 ちとくひん様をくくく心た

丸 八 圓 八 丸 良 丸 水 丸 入 丸 水 丸 良 丸

鳴るやわくらくに蕨の  
 ぬま人手ははるまの妹を  
 形と居ぬ一昇りの作  
 觸のさうまの流るる花の波  
 常すやあくるこころの

丸 良 會 丸 水

朝の字重行亭

取くしやんをあめのかた子  
 母手なれきさくく舟戸  
 絹織のきつそくく楢あ  
 園浜生れ末の三日月  
 赤あすあうくくく梨の

丸 重 行 常 良 丸 水

瑛子 小樽と什  
 山の瑛子 清之り 帆 船  
 藤ふみや里ハくちとく  
 栗稗をり 女の齊 喰 飽  
 うのら ーく 紙 新 石の戸  
 赤根を母の記念に 梅をり  
 春子 瑛子 小田の 新 紙  
 け 秋 門の 板 鴉 ーく  
 教 乃 ーく ーく ーく ーく  
 き ぬ ーく ーく ーく ーく  
 木の 女 井 娘 小 物 可 け  
 算入の 花 是 ーく ーく ーく

丸 九 良 行 丸 九 良 行 丸 九 良 行 丸 九 良 行

自らの廊ハ 柳子 焼 け  
 香 記 の 巻 一 一 一 一 一  
 奈 良 の 物 子 豆 鼓 ーく  
 け ち 子 先 河 ーく 中 谷 揚 子  
 高 老 者 一 一 一 一 一  
 ーく け け 八 月 一 一 一 一  
 奈 ーく 一 一 友 一 一 付 一 一  
 子 け の 鹿 一 一 一 一 小 松 一 一  
 皆 牛 の 一 一 一 一 踏 一 一  
 乃 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
 ーく 一 一 一 一 一 一 一 一  
 的 一 一 一 一 一 一 一 一

丸 九 良 行 丸 九 良 行 丸 九 良 行 丸 九 良 行

涇泉よりそふ了陸奥の秋風  
初原の頂よりさふ水のたゆし  
山をよ化つ字の暮智  
尼名男千やきつこらし  
ゆきかよふおふお結橋  
花の樹葉とやうい味さる  
艶々しきまのしきまの山を

良玉 丸行 良丸 翁

酒田不玉亭袖浦に上

ついでと山や吹海のけり又深  
海松かたの磯よりかむ帆送  
月の上関及をかん海おろく

翁  
不玉  
曾良

民のかやとのりて了秋風  
よきよきゆくにやるとる色相  
ゆきゆきの玉をさふお義の毛  
火を替りけり白髪もれは  
海をハしらもふおやしてかろせはあ  
松をよおくる武隈り去る  
岩林おのりきよきよきよき  
ちかすこの秋より新のかの  
お供してゆきよふおと忍ん  
は寺の末もみよりの入  
新法と女萬葉寺の終りあ

良玉 翁 良玉 翁 良玉 翁 良玉 翁

夕のつらさのちと高の念  
 将の旭に霜雪の月  
 二 物のつらさ本魂のつらさの風  
 すくさのつらさのつらさの山  
 強かり蹴つるつらさのつらさの  
 枯を和さむるつらさのつらさ  
 物をつらさのつらさをつらさのつらさ  
 えらつらさをつらさのつらさ  
 つらさのつらさをつらさのつらさ  
 月をつらさのつらさをつらさのつらさ  
 海をつらさのつらさをつらさのつらさ

良玉 良玉 良玉 良玉 良玉 良玉

十冊  
 六

小袖袴とおくの戒の海  
 糸う原の母のつらさをつらさのつらさ  
 糸う原のつらさをつらさのつらさ  
 糸う原のつらさをつらさのつらさ  
 糸う原のつらさをつらさのつらさ  
 糸う原のつらさをつらさのつらさ  
 糸う原のつらさをつらさのつらさ  
 糸う原のつらさをつらさのつらさ  
 糸う原のつらさをつらさのつらさ  
 糸う原のつらさをつらさのつらさ  
 糸う原のつらさをつらさのつらさ  
 糸う原のつらさをつらさのつらさ

良玉 良玉 良玉 良玉 良玉 良玉

文月やらのつらさをつらさのつらさ  
 良玉

あまのそとをさる 桐の一本  
おと方より食をくさるるをけり  
海寺の小舟をたを上の段  
新橋の舟をさるるをさるる  
おの木の舟をけりくけり  
夕あらしをさるるをさるる  
豊とくおとく 船りり  
さひりけぬをけりくけり  
きぬくの坊を起とさるる  
数くの根の舟をけりくけり  
後をけりくけりくけり  
のくらしをさるるをさるる

左葉 曾良 眠臥 此竹 布雲 石雪 執筆 良葉 義年 菊 葉

麻引くをさるるをさるる  
礎おすくをさるるをさるる  
多らし二人の山本の院  
舟の舟をさるるをさるる  
二 舟の舟をさるるをさるる  
舟の舟をさるるをさるる  
舟の舟をさるるをさるる  
舟の舟をさるるをさるる

石雪 曾良 良葉 手 桑 駒 雪

此百十句ありし

秋風おくら父の松より  
かのをを跡をてに拾ふ  
跪し後より玉此古  
種植る小枝をむのをを流  
角のゆりこれハ長  
二 扇をひく雪をたむき雪の上  
一 ちり鳥人多たて飛  
無山や総て小砂を拾ふむ  
科の起りをも雪落り  
受てよの百そと魚の身を流  
人ひきりしききききき

良翁也右雪翁良也石雪翁

松柏砂粒し嵐れきき  
子を耐さをとる粒の床  
流り老の杖をぬき現る  
昔の月山より向ふ  
捨皮むく老の尻に秋意く  
志を流し家此海を牛形  
塔頂の孤村のより雪  
清なるのあり九半流し  
かきあらし地蔵の像を  
強とたあふ里のそ  
仇法をきく老の寝入  
身本をきく梅の先生

良翁也右雪翁良也石雪翁

志原くくく名や少ね吹居花  
 花をも尺わて新くくく月  
 踊るききいき秋の鼓あむ  
 ずくの踊るをも刃ぬ夕々れ  
 寺くくや之新あつてもまに深  
 河くくくくくくくくくく  
 浪あふき破く河けくく天を捨い  
 雨くく洲崎の思をもくくく  
 多たくく松くくくく火ハきし  
 乞食起くく物もくくく  
 蝶のゆふてハ望くくくく

菊  
 披墻  
 木枝  
 谷ト  
 卷生  
 志捨  
 夕布  
 教益  
 親生  
 曾良  
 枝

夢をももむは花やくくく  
 夕雨のすゑ乾くくく  
 夢をもほえつても新あし  
 侍のそくくくくくく  
 そくく舞習ふ末の世くく  
 洞子くくく月をくくく  
 波くくくくくくく味ふ  
 新あむくくく床やかくく  
 帯くくくくくくくく  
 禁くくくくくくく  
 ぬくくくくくくく  
 去貴捨拵くく人くく

弱ト枝  
 墻  
 親  
 拵  
 市  
 益  
 生  
 良  
 枝



かゝらとらうに性ありまふ  
一梅子折れおむ三々の月  
秋のちかきく糸屑のひろ  
宿ありく之八の袖のよいゆく  
あつちよきくさ虫くく尺む  
まされ子まのふれい九極まをに  
身くうくひし伊おの板あ  
改代うもふえあしなつ  
宍崎のさる北仕方ゆき  
園ゆし五の鳥ハきれうう  
あうさるくしのけのまけりも  
大うくハ村くさるまうけりう

市翁 蟻生ト 観翁 枝良 蟻 観翁

虎くく尺ゆる所のまきり  
風送る被りして涼やれ  
若衣ももり女ももり  
古ふ又まのあしもあしき  
あけの情子哥やゆきむ  
まらうまかしくみと捨りし  
花子もまらしてまを友  
まのあうも筋よふまやう  
うまらくくやまふ江の山

市翁 蟻生ト 観翁 枝良 蟻 観翁

かゝらとらうに性ありまふ  
跡は若きまに料理もは若子

翁

みーのきまゝな秋の夕紅影  
月もつゆゆのまゝ了次々  
すき百さひーき村れ生垣  
秋後治の門をふくして樵の音  
小桶の清も枯ふ竹の音  
セッテウヒとあうしと嫂の恩  
ろと系ーやうあめろろ系  
よみ習ふ高き花あつた地  
ともー清もハヤチヤウ月  
風さふく笑ーしとこーし  
村のり立木干干あゝ編  
ふーいながううぬ中と縁理し

一泉  
左任  
ノ松  
竹袁  
終子  
雲口  
乙州  
如柵  
北枝  
曾良  
流走  
泉

きーめやゆるふれさひめ  
系うーし宿屋系ぬよ急名  
阿ー多踏くお走山のや  
子の戸は花もーしと知ええ  
畑歩ーもーしとさ

扇  
枝  
口  
浪生  
良

七月廿六日親生亭

ぬれつゆゆ人おわーしやうの葉  
花かろれろーしとたあ  
月尺ーし漁もあす船あけ  
干ぬかーしとささらーし  
おん手屋おのりおのたえぬ

扇  
親生  
曾良  
北枝  
生

常あゝくゝ了る女一は花  
々を踏くゝ湯水の鳴は出あゝ  
ふ戸を打てて替ふ酒樽  
打つ雨は古も置もあられ  
花の地を舞う枕かゝるや  
晩鐘の響のあゝと鳴りや  
あゝとすゝむる雲の船  
肌をきぬ女のかゝるゝと  
ぬぬもうち花をさゝるゝ  
よまゝうら木をうらむす  
のめあゝ上る塔のあゝ  
あゝは竹の枝も只一本

翁良枝翁生枝良生翁良枝翁

あゝあゝきゆる秋のあゝうら  
ねすゝゝとあゝの唾めあゝ  
あゝゝとさゝる月の沙陵  
あゝゝと花をうらむ里らゝ  
解る翁はあゝあゝ  
枝の羽やあゝあゝ  
くゝの上ゝあゝ  
ひきき木魚を心角あゝ  
目境ゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ

生枝良生翁良枝翁生枝良生



ちうくと枯くさぬの杖学  
 渡し香鑑する丘の月うけり  
 去けし位くお屋きん立る  
 海音にきりきり傘さし  
 ひそくうきひくく大手の梅  
 きぬや二のきのこく模のひら  
 音つる油凜とらあし  
 秘をうみまるともたしし  
 吾子つりたれて信のふらたて  
 提灯も湯女うすけりあそび  
 玉子貫ふくまると山もと  
 柴の戸は納豆くくは静し

亨子  
 被験  
 子  
 子  
 子  
 子  
 子  
 子  
 子  
 子

妙象きくく竹梅きる 菘  
 鶴着す人ハ二十子みくぬ魚  
 よきて舟うり月川編  
 漏れおぬ芦屋いとおくく  
 古季の軍の骨ハ白 暴  
 やふ入の嫁や送くまき西  
 虫みほひの髪洗ふく  
 うつとくしき佛をゆきゆき  
 けりけりかちく園基の仕合  
 首かけし卒の餅揚りてしき  
 尊ひくまりの志雲の古里  
 とくくとめく和町のぶく

子  
 子  
 子  
 子  
 子  
 子  
 子  
 子  
 子

今利を唱ふる陵の坊  
 竹ひのく割一袋の岩根  
 中家の早苗中一百姓  
 郊の力田なる赤子を望み  
 付ぬ敵の法回ハ一き秋  
 良定くくハ龍巻の舟中  
 守の館一着かして花  
 十重二十重もつける  
 秋葉一袋もこけり  
 旭のまろくも  
 残光の報養くく作垣

子 堀 子 堀 子 堀 子 堀 子 堀

山中の温泉

了くく了きゆのゆく  
 泉中くくく山のみ  
 月くくと角かき  
 霧くくくをやり  
 青淵くくく花  
 紫くくくく  
 山をめぐり  
 遊女四人  
 昔書く  
 髪ハ別れ  
 夢の系

良枝 良枝 良枝 良枝 良枝 良枝 良枝 良枝

北枝

先細の髪を傳へくく門  
まゆのあやう北上望かく好し  
あやうのさうく均穠のう竹  
秋風をものいふぬ子を傳へし  
まらき紋のほくく葬礼  
花のまの古ふおの町作  
まを跡さる言何の答  
長子や志強く新波の貝を  
浪の小瑠玉あけす芹 梳  
多松子志くおの波あさうい  
くくくくくくくくくくく  
流小油蒸ものうすの古風し

菟 枝 菟 良 枝 菟 良 枝 菟 良 枝 菟

三十一  
九

非菟人さる人何菟 菟  
明ふし何菟子たし何菟  
ゆさ花子他く三り月の細  
初昔の草の枕子時りし  
か細もあうし何菟何菟  
飛瘡ハ素高り永も何菟  
向くれくくく何菟何菟  
向長ふ仙女の姿たをやう  
あうの何を志強くあう白浪  
仲經う字治の何と何菟  
寺子使をさう何上  
珍持て遊ん花のあう

菟 枝 菟 良 枝 菟 良 枝 菟 良 枝 菟

三十一

破狂人と保生うれゆく

執筆

九月八日小却しりの書信

路通

一と(何)尺あるは秋の萩の由  
 むしの徒の胸を帯縁の白  
 紙子もふとあつたに内冷る  
 高ししにむきむき世のこころ  
 榎本屋の榎本子將を信守るむ  
 念のすしりぬるはむかしに  
 糸袋く人々尺ささる又万巻  
 吹そこのこころ好のまことさ  
 蕙のうさつ子海に破れ髪は庭

墨夕  
 白之  
 浅夜  
 翁  
 曾良  
 父  
 通  
 良

ほととよあつしとぬふそあつ入  
 秋のうさつ子將の信を信守るむ  
 月尺あつしとぬふそあつ入  
 きりし(の)貝拾はる布ふくろ  
 地糺結をききりし(の)名さ  
 きぬ(の)尾目と種を根あつん  
 舞、垣根子あやむおとけ  
 豆敷ひくまふくぬ甲の衣  
 きのの葉をききりし(の)名さ  
 きさ(の)和や首ゆく胃まきりて  
 あつし(の)尺ささるは星  
 蓬まら(の)形子米積が(の)うき

本因  
 秋  
 之  
 翁  
 通  
 因  
 秋  
 之  
 翁  
 夕  
 良  
 秋



このころ 室よりあそびしるる  
 ぬききりぬのむほりけ張と記  
 旅うら旅くわひひまめ  
 夢さる無夢あふの歌し  
 業まつり人平けし  
 田を買しる心しるあふ業門  
 知呪うら業れ入口  
 夕月物茂をうらう業張て  
 そらし(空ふ秋の嵐 煖  
 谷く(石新海を飲とあし  
 くらや過ぎれうらう梅上  
 夢あれえやとて送了 約 詞  
 通 夕 夜 良 夕 翁 通 歌 翁 通

麦もうしけて一もとのま  
 聲をけききりる花はう  
 故郷しるるさうらふのけ  
 新華 夕

九月三日 最良の歌

野河しるるに橋のまきり御如  
 山にまきりるるを萩の翁  
 初月や先西も星をさらすん  
 波のさすく人もあつらう  
 本を扱て枕のまきりるる  
 風のささうあふりあふり瓜  
 夢のつり隣の粒をふりあふ  
 不知 荆口 翁 如行 左柳 浅香 斜嶺

己みよやあやふき川も車ひぬ  
いそよお人のあま川さあさ  
叙若の面をわさうけり位  
き川よひの鐘をわよき思ひし  
業よめぬ月のさむし  
花をよしと結きくさう苦みれ  
細代の鮭我市のあさけり  
舟の形をよきうけりかきう  
上落くらも松のささのあは  
花のを吹雪の長橋ひくさ  
あきりえそをもく岨の山よあ

知風 知 翁 柳 翁 香 巖 知 行 風

とやと吹ぬきとさし言の菊  
くさくさふくさ音月のあ  
新さけけ古季の勢の写かき  
をさすくしと山のかきあま  
酒飲の癖子障子をゆさる  
程柳りしくと文をくさる  
是のうら探る銭をすめり  
手をもつれてさうさうさう  
二人のあま心やあぬさむ  
けつり 櫻子 精進うさう  
兎角さあさすさをもたれぬ

菊 左柳 踏通 文鳥 越人 如行 荊口 此筋 木因 銭香 曾良

青物のしらべの代魚さういゆ  
 飽くそ一極さうのころ悉くして  
 歯めいけとあれ八貝もあきり  
 自をくは中めうてくさし  
 何うつふぢう青のふあ  
 一構うけううう山の麓頃  
 培うくひこまきの糠みそ  
 茶菜の姿はうういひあうく  
 村さうけううううおはうく  
 叫きくうり柳のそはせうう  
 二代上手の醫ハあううう  
 楊ろ比エううううううう

斜廠 柳 翁 口 通 人 因 筋 良

点作しううらぬ物もさうくして  
 冬露の中のおわうううう大まき  
 葉のまやうも不葉内あは  
 美しくお生れつく物うま  
 尾ううううううのまきぬ  
 月影う具是とやうとすうう  
 葉とうううう一株の葉  
 何うううううううううう  
 追まともまうううううう  
 丸餅うううううううう  
 物のうけううう母ううう  
 花のかけ強倉屋の叫ううう

竹 梅 人 通 翁 以 筋 良 因 竹

梅山子よき秋のつよ 寄 辰

三十四

いさ子供とくまのつらん玉露  
 折あきりさく木枯る心  
 雨等の風やむ法を袖をる  
 居ま撲く〜むかひさむら  
 麻の衣〜葉かかく美の衣あ  
 き〜く〜花の味の周 粟  
 雑取のおもふもあつた  
 物とふらちの塊の〜〜き  
 冷ふり〜粟斗干〜海苔妻

良品  
 梢風  
 之堪  
 去芳  
 半銭  
 不  
 弱  
 莖

けうけとよけよ雨の子枕  
 冬残心のい〜い〜みえ  
 たり〜も〜〜〜わあ〜  
 月の言傍葉を〜〜〜  
 月入〜〜不二の〜〜  
 秋風のす〜れ〜ハ〜  
 等〜〜〜〜〜  
 雨〜ハ〜〜〜  
 雨滅 扱く〜まの〜  
 涙立〜耕す 履を〜  
 着の〜け〜〜  
 袖を〜〜〜

風  
 秋  
 芽  
 翁  
 不  
 荳  
 翁  
 風  
 翁  
 翁  
 翁

三十五

いふことかきし 真州 家  
 若生し 其の卒部はをばこれ  
 林とらききし 結ぶ葉の戸  
 庭の舟と馴れは安んずるの音  
 風遊仕上し 風のみのゆき  
 寺の中、操廻ういふる 旅衣  
 よふ石をこれハ佛きし  
 瑞陽燈ハ月をくらりし  
 傳の妙み 別 雪の夕々  
 をみよし 一ふれめくあつと踏ぬ  
 鬼うしれと 畔し 網とら  
 生れ未し 燈子のよけの雪のふ

不 風 菊 花 不 菊 芳 風 菊 不

白雲あらしに 初子うきをれ  
 左義長のゆきし 雪を待  
 寺のうきをきし 雪

花 孫 芳

園風

枝やをきし 雪の月  
 うきしをけし 楳のきし  
 曆とむ人ふむ 里も安んずる  
 かきし 牡丹の名を度めり  
 秋し 雪をすくしの上の雪  
 扇の角をほし 雪

梅 額  
 半 浅  
 去 芳  
 良 品  
 風 麦  
 菊

初かきあきり 狩野り 善  
ての籠子とてしるお 様  
おこきしを あしよはま 権のうけ  
信者の海よりれ 素襖をあすた  
かたねのそを 贈る古  
村人の界の町らうくさあうそ  
鶴江門流をそくうくうは  
造りあしよとそくの海も甘けり  
月もあきあき の良きくぶあし  
妹うや海子 納舞の生か  
あまきちらうすく 越の昔は茶  
そはくしの糸の名おを 授けり

木白 款 配力 麦 風 芬 子 孫 力 水 麦 蜀

かーうけらる 煙 派の 守  
此 ちや 勝をの 不とととて  
肩子 おめし 併の ききくひ  
あしよ 男と 尺をふ 里か  
そあはて 大の 流をかひ 赤  
華 礼子 赤ほし ちの 表あり  
女 嘆 十うら 休の 戸の 内  
信 弟の けの こ 餅を 配るとし  
背 中ハ ちやく か くら 赤けり  
ととれらる 姑の 巾着 たる ねん  
子をもひく 尺の 猿 浮の 魚  
あしよ 人と ちやく し 魚けり

白 芬 款 白 菊 芬 不 麦 風 款 白 芬

ふうとちりーや 勢々 徒心  
 七より夏をかーる ぼろくさ  
 なるーて 女を河ーき 女を月  
 柿の木に枝をももーる 女を月  
 飛てまきさーる 女を月  
 けり 女を月  
 水斗の星をーつて 女を月  
 鹿の爪をーつて 女を月  
 松ハ一か 山の 神  
 乞食ーる 女を月  
 縁子ーる 女を月  
 妻の角をーる 女を月

力 芳 翁 風 疎 白 秋 共 麦 翁 風 疎

七より夏をかーる ぼろくさ  
 なるーて 女を河ーき 女を月  
 柿の木に枝をももーる 女を月  
 飛てまきさーる 女を月  
 けり 女を月  
 水斗の星をーつて 女を月  
 鹿の爪をーつて 女を月  
 松ハ一か 山の 神  
 乞食ーる 女を月  
 縁子ーる 女を月  
 妻の角をーる 女を月

力 翁 風 芳 白 不 麦

百歳  
 式之  
 翁

万々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
 聖の鳥をさすくさくさんまの月  
 統おし強ふ家々の衣手  
 若良のすくれのすれお大くひ  
 素良の小称直もあふらうし  
 提灯を燈きこしひし陸の芳  
 残子羽おをかーあほりさ  
 浦くもえさうゆく人へ物さ  
 古ふ名は家の家きーくく  
 るゆの釣さく鴨く鯛をかき  
 志河くーくく青山の秋  
 子習ぬ衣を砥く打をける

習生 村鼓 楓市 梅顔 牛 粟 市 鼓 蜀

瓶子ううそくくもふまきく系  
 杖突くうはたへ坊々花の坊  
 古めくーくううけく人急る  
 吉の末て猿子小吸を蘇さく  
 みゆの屏風に画く鳥獅子  
 俵やーおかさーくく国扇  
 夜更ぬくくく風さーく  
 ちくくくーあくまのあにさくこ  
 おくくくー老鼓くくやゆく  
 柴くまの市北帰く酒寅く  
 ゆ々の種 鑪の月くく庭ら  
 福妻く舟くふ習ふくく

杖 市 鼓 牛 蜀 杖 粟 鼓 蜀



家子満くわえもの  
子供お侍のあそび  
子木のひらき  
狩衣の下知の志  
帯を志われハ  
新ぬいふも  
相お法子  
初春の耐  
控りけり

被案市く弱弱く弱案

くろ風きのみさうい

玄印

虎首ぬわねふうくみ  
十家舞も凡ふ米の  
くろゆてあふ旅  
くふの月雪のもの  
よれ岩組子秋の  
一株の葉ハ物子  
人足ハハ丁了  
片そハ志ふふ  
右もふくくも  
そふくく重  
尾上りくつ  
東玉のめく

舟竹 翁 竹 翁 竹 翁 竹 翁 竹 翁 竹 翁

江戸の月を待しのつ 糸  
秋風千木跡 似るも吹きり  
並ふよ 立ふ 或方 陶 了  
節きうう 志智の 田の 雨きう 三  
ふ 千 おろれ ち ち ち ち ち  
まのり ち 長 柄の 傘の 紐の ち ち  
縷斗ノを 付 ち ち ち ち ち ち  
白粉 ち ち 代を ち ち 屏の 鏡 ち ち  
珠 ち ち ち 業を ち ち ち ち ち ち  
風 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
おを 引 ち ち ち 梅の 片 ち ち ち  
休 翁 申 休 翁 申 休 翁 申 休 翁 申 休 翁 申

四十一

月夜をあの 娘の色 ち ち ち ち ち ち  
姓の ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
首末 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
木 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
雨 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
桃 雪

四十二

しりたのそりしりや 暮の 蝉  
夕合ふ小燈の 糸の 月おこ  
秋のそりしりと 布のそりしり  
曾良

あさの 此道も 暮の 糸の  
ゆらゆらしりしり 何れ 糸の 糸の  
暮の 糸の 糸の 糸の 糸の  
糸の 糸の 糸の 糸の 糸の  
糸の 糸の 糸の 糸の 糸の  
曾良

田舎の 糸の 糸の 糸の 糸の  
糸の 糸の 糸の 糸の 糸の  
糸の 糸の 糸の 糸の 糸の

松名 早苗なりつて 糸の 糸の  
いよの 糸の 糸の 糸の 糸の  
糸の 糸の 糸の 糸の 糸の  
曾良

風流亭とし  
糸の 糸の 糸の 糸の 糸の  
糸の 糸の 糸の 糸の 糸の  
糸の 糸の 糸の 糸の 糸の  
風流  
曾良

盛修亭とし  
糸の 糸の 糸の 糸の 糸の  
糸の 糸の 糸の 糸の 糸の  
糸の 糸の 糸の 糸の 糸の  
榊風

物もろく棒ハ起方子埋けし  
木端

六月十五日青島由青島分亭

翁

涼しき海へ入らるるもみ川  
月をゆりあす浪の浮海松  
黒野の森田く虎の巻めり  
ぬもとの海子あしむききれ  
波とらのおみか付て市を待  
新しきあしむる宵の油火  
不操娘のこころをさふ忘  
こころれよ虹子蟬聲の心  
會覺

杉の葉もをさく之日月  
不玉  
以り絶えらるるおし  
曾良

茶欄子つらさお花をそま  
棟雪  
葉のすしおを扱えけら月  
更也  
娘もつらおを秋のしきそ  
骨良  
万のしめけし言葉のい

翁を二枚しりて

小春

ふゆのやしのあけあしりて秋の  
翁

初嵐山あり方北へけし  
にちらりりこき水のうき魚  
物とて扇引さくその竹うら  
吹ふきき方子きほひか  
水枝

送子

秋のうけり先しゆ管原如  
舞うる雨やうき舞子舞うる  
みくともをつれまに秋の風  
吹縮の買ひもききみゆる  
木田  
翁  
光清

元禄三庚午

二月六日

昔もこれとてさしきりて  
古井の地まき入る  
ゆたかの浦さるる夕影  
指さす方子月ひらむ  
梢も隙の棟をかきまき  
舞を吹折風のゆき  
遠しに木のきききき  
世を去るまきい  
世より妹も後をよるまき  
翁  
木  
百葉  
村鼓  
式之  
梅額  
一桐  
槐市  
被

昔は海子二百餘す  
 古の成り十九ぬきなく  
 として海とよみかたも  
 修持多し趣き木立の  
 地吹人ふなすむふ  
 珍物を禁の市にけり  
 探婦をむけハ昔若く  
 探婦探ふもあつて  
 宿むくさやうさ  
 喜の色新古今く  
 尾上をもむく木魚  
 かく雨の雲きぬ海

木 崩 木 崩 之 号 桐 崩 木 崩  
 市 崩 木 崩 之 号 桐 崩 木 崩

素々不苗も一度  
 けりて終るふ人  
 位して子の子の  
 ありて末猶ほハ  
 御幸をもつて  
 大肉子并戸  
 地震子ころふ  
 母の里も又も  
 形尺とひんを  
 掛着る小神の  
 三味線はやく  
 東山井も花片

木 崩 之 木 崩 市 崩 桐 崩

四十五

けりておぼろそ 智恩地のも  
をそふ河の杖 ことをしとまのた  
水子 して 玉 たいめ なる 子  
空 々 相

木のもとのに汁と 鱈と 梅のふ

西の長 与子 けりて 承りて

娘人の志 しみいふの まるき

こゝろとあらしめ 左刀のひふとこ

月やたらして 後の 肉裡の 司 石

物 印 つら つら 松の とや こと

鮎 置て 三葉 駒子 秋の 木

蜀

珠 碩

曲 水

菊

水

菊

三

片をささるしく 燈のさる 酒

入也子 流石の 涌出の みるる

中 にも さるの ときよ 山 依

よよと 霞只一 かけ ちり たる

かきよ 筋の 意は けりて

物さよ かねの もの こと せいの けり

内尺の 巻の 袖は ねむり

秋風の 形を 掃く 浪の 音

月 ぬく 方や 白子 なる 松

子 都より ちの こと けりて 田

眼 元 死ぬ こと なる 湯 衣

何れも 塔の うつし こと なる

碩 水

菊

碩 水

菊

水

碩 水

菊

水

碩 水

菊

水

四十六

又古の如くはらうきくあは  
くすものやうきくあはら  
態の尺とやと後よりく  
手朱弓紀の并方かしく  
証し元くくくあはらく  
双六の目を取くくあはら  
仮の持物くあはらく  
中（に）去下くあはらく  
家系ハ里れあはらく  
みくあはらくくあはらく  
月夜くくあはらく  
花すきあはらく

水 石 水 石 水 石 水 石 水 石

只四方ある 菅原の  
一巻の強むらうとく  
醫者の筆名の戸ぬ分  
花吹ハ芬時あはらく  
地くくくあはらく

水 石 水 石

木のこに汁と能くさく  
の白くくあはらく  
蝶陣とあはらく  
あはらくあはらく  
多様うのくくあはらく

雷 去 良 風  
洞 芳 不 麦



精のふくむる最の粒の云  
 石櫃の結目と足しは昔の家  
 魚よりれしつる鱈の子供も  
 お宿の志はしりやとおもむ  
 木幡のつらみのまの夕られ  
 吾虎と人をむかひのふり  
 井戸のたふらふりさき切し  
 清しき程のまじりぬを  
 むしりもたしにたしむる  
 痛しむるのまじりぬを  
 非よりえらつる船毎の左の  
 かんちの紅つけりし花さく

半 芳 麦 菊 不 洞 菊 麦 芥 不 麦 菊

二の形ふかり二の粒さけ  
 陽光のまじりに揚をひかす  
 すけふくせしはまふさけ  
 きのふ粒の端端さく揚の  
 ひよくのまじりぬを  
 鱈のふくむるまじりぬを  
 まじりぬをまじりぬを  
 佛のつらみのまじりぬを  
 原やまじりぬをまじりぬを  
 ひらふまじりぬをまじりぬを  
 菫子粒のまじりぬを  
 夕の身を扇に結く秋の風

三 菊 不 洞 菊 麦 芥 不 麦 菊

あふりひう人いよのあし  
きう菊のちのちと名をつけし  
能くすゆんのかよけさ  
く入る二葉の弱も控さす  
淵さくすくぬ志のち  
海さく花の涙もあれす  
きくわくく家居く

菊 不 卷 洞 菊

伊賀の山中  
種芽や花のさうりにまゆ  
火燈をさけ風とく  
酒母のわらも終りさう

菊  
半 紗  
云 芳

秋之くく草のち手  
まゆの七つ起す業花  
ひさこの札を付く  
秋風の柱の戸を揺る  
小傳のくわすくくす  
安くく洲の河糸のから  
多か笑の抄子と川のく  
手紙の男もくく三梅  
人くくくくくくく  
萱州のさかかぬ色  
秋之際此啼死く  
月さく石家宿さく風の方

不 菊 不 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊

こちれて喜ぶ程瓶の香  
新の何の香のよ海に吹き入し  
後の何の香のよ海に吹き入し  
猫の目此の香のよ海に吹き入し  
何の香のよ海に吹き入し  
かゝる香のよ海に吹き入し  
ゆゑの香のよ海に吹き入し  
ゆゑの香のよ海に吹き入し  
ゆゑの香のよ海に吹き入し  
ゆゑの香のよ海に吹き入し  
ゆゑの香のよ海に吹き入し  
ゆゑの香のよ海に吹き入し  
ゆゑの香のよ海に吹き入し

芳 孫 翁 不 翁 芳 孫 翁 芳

いとちれて喜ぶ程瓶の香  
田舎の香のよ海に吹き入し  
風を吹く香のよ海に吹き入し  
香のよ海に吹き入し  
香のよ海に吹き入し  
香のよ海に吹き入し  
香のよ海に吹き入し  
香のよ海に吹き入し  
香のよ海に吹き入し  
香のよ海に吹き入し  
香のよ海に吹き入し  
香のよ海に吹き入し  
香のよ海に吹き入し

不 芳 孫 翁 不 翁 芳 孫 翁 不

ついでに香のよ海に吹き入し

翁

せめて涼しき草の香 燈  
初月の影長繁子たうひし  
石子いゝれおひくくこ  
松の本を移風ささよおし  
瑠璃もやしき翠の鳥よは  
いひれさる女もあはれしを  
夫敷く腕のよききき  
古塚古のゆを拾り  
柿の葉とく童かし  
さきさきおさよふしわらわ  
くききおのほあわく古  
花よくおのほあわく古

奇香 尚白 自咲 通雪 松洞 玉 咲 翁 宣考 白 洞

杖も 杖も 昔 笠の 家  
いあつておし社おあれ  
よこしはれ男のけそあ  
花もえし昔おはるし  
あつておのほあわく古  
麦あつておのほあわく古  
されしはるしおのほあわく古  
神火のうらうら  
おのほあわく古  
おのほあわく古  
おのほあわく古  
おのほあわく古

江山 翁 咲 白 香 雪 山 美 江 一 翁 空

三陰ちろくそ秋を踏を  
 うき人をわえこいそく月のお  
 大勢の幸しおふたそん女  
 一燈や二条ゆくゆ小細堂  
 実の子告こすういよの山  
 こりくともあそやあきしあさ  
 春をちろくし雨の晴  
 疎時に伯父の秋くく尺多  
 秋の妹、子を産み来り  
 探さくおあ戸もあまを林に  
 うふあうくくくくくの初

白翁就真香江白洞考白

市中ハ物の匂のやまの月  
 笑——くくくくくくく  
 二和の字も果しう種をか  
 灰くくくくくくくく一  
 比節ハ和とんくくくく白  
 只去拍子子くあまをふき  
 多あくくくくくくくく  
 花の芽とくくくくくく  
 花の香くくくくくくく  
 能中の七尾のあハ作く  
 魚の骨とくくくくくく

凡此  
 翁  
 去来  
 此  
 翁  
 来  
 此  
 翁  
 此  
 翁

待人入し小沙門の環  
とくを屏風を偏す女子と  
ゆ屋ハ作の笑子とひき  
苗衣の衣を吹流す夕  
信良年く寺より陶の可  
猪皮のきもを穿て秋の月  
手より一斗の地子とく  
又六か生朱つけとあま  
之袋よりよきもの思ふ花  
追立てるやあまの刀持  
丁粒りあまの海しん  
戸陰子とむらからひの衣を浦

末 紀 末 篇 紀 末 篇 紀 末 篇 紀 末 篇 紀 末 篇

了并きもりいりり色つく  
らうくと字體もむの月夜きし  
君とあまのひり起し秋  
手おりにらりい着る外前し  
ゆらみし善のゆをぬ半棧  
孝院とまをくくわらハ歩破る  
いのちりけし撰集のさ  
きん(工)おかきくくる志を  
くき世の果ハこれ小所し  
何ぬ了強すくもあまの  
お菊とあまの度や極しき  
まのひり風定する花の陰

末 紀 末 篇 紀 末 篇 紀 末 篇 紀 末 篇 紀 末 篇

五十三

かよふこころぬ直もあふしき 木

原け楠の空やみくきりし月 死

油さすりして中宵痛する秋 菊

新しきみあふしき月影を 野水

あらししきし十のさくらき 古来

子代経の物語をきりしあやし 菊

しるしきしきりしあやしき 木

系切しけしあやしきあやし 木

摩耶の字をわきまのあやし 水

みゆしきあやしきあやし 木

蛇の口をきりしあやしき 木

物思ひをきりしあやしき 水

むかしきりしあやしき 木

筆蹟と人きりしあやしき 菊

あやしきあやしきあやしき 木

河内の秋をきりしあやしき 木

何をきりしあやしきあやしき 水

花とちりしあやしきあやしき 菊

木をきりしあやしきあやしき 水

物さすりしあやしきあやしき 水

案さすりしあやしきあやしき 木

あやしきあやしきあやしき 木

船の籠をとりしりあへし  
 十さしお女の習もはらふて  
 何おもひいそ 根のふく  
 夕有夜言の臺所のゆふ  
 人ともまはたし 何うふふの  
 又と大よりお飲をたあす  
 堀のうのまやまきし  
 加茂の社ハ能や  
 物くまの屋をうきく名り  
 雨のやうのやうの 迅 速  
 金崎のまはりのあはれ

水 末 翁 水 末 翁 水 末 翁 水 末 翁

志うらり（あす菅の篠）  
 糸 糺 後 一 丈の千 俣 子 子  
 喜ハ三月のけけり

水 末 翁

秋きて干瓜くき 南 彦 子 之 田  
 早稲穂をすくう 此 前 八 月 月 日  
 人ごとく 正 秀 之 道  
 借 柳 正 秀 之 道  
 虎 背 正 秀 之 道  
 春 提 正 秀 之 道

及 肩  
 水 末 翁



たふしぬ路の勢もたふしぬ  
す急なうふ路の勢もたふしぬ  
非の怖る娘のしゆき  
うけし金合の束し止し  
肌寒しと橋渡しめり  
舟の舟海うせ所きを唱餅  
業も耐多くと寺の住人  
上張り鐘ぬすむ向のし  
ぬ舟もあし雲の船心  
としと橋板ぬすもきく  
花ひつりぬしとまの入学  
たふしぬ路の勢もたふしぬ

志是項肩房志系項花系行是

羽折橋の備あつたし  
行りしてお起習ふふふ  
業も耐多くと寺の住人  
母親の体立て尺さる嫁入想忘  
えりしとむら且歌山伏  
は戸店も持て在ふの門擁  
麦も急なうふ路の勢もたふしぬ  
後引の舟もたふしぬ  
舟の小舟もたふしぬ  
志のしとたふしぬ  
こころも告つ秋のひよと  
山畑の木疎色つく風かき

扇肩系扇志是項房志系項花系行是

石地の坂を帰るや切  
情は響の太工唄  
あつたを跡す喜良の借上  
那の度と素しちを極度け  
かゝしとすらすのゆけをの

五十一

月尺すゞ雪千舞きおれ  
庭の柿の葉のむしり  
火桶ぬる直のまほを  
お出のの、古ふ投持米  
尻張のめしこころる塔小鯛

百たき火く川のあ上  
字實とすのく人ふふ美の巻  
雨のくすくす昼故痛きをぬ  
一切らふらして結ぶ市の字  
さくさくさくまは飯はくおこ  
いそいそとけしけし酒筒  
あふとふふれしてさくあつ  
月のおおきえしてさくふたのあ  
枯枝かゝるや和歌すくすけ法  
侍者やあはまきさ秋うたて  
大工の換をいのれ運空  
三々の積ふは積ふ花さこく

五十二

八さうくうとまきの吹海  
つる陶のふく根のたの屋うそ  
抄のらるるうすくむえくを  
商人の魚うさくする細秤  
物よくちやたつていさくしよの歌  
蒜のまゝとまそつていぬまをい  
異奇うらうらるる月月の慍  
烟の帯うらうらるる言一屏智  
言言をささるる雪くとまうら  
若菜仁にう菜の葉向の風さく  
随分ちまひふ小の三々月  
言取の城のちたひ一里守  
霜 白 霜 白 霜 白 霜 白 霜 白 霜

さきとまきうらうらるる  
ありのまき。あゆ久可言  
小まちうらうらるる  
いすまひやうらうらるる  
まらみかまきうらうらるる  
あつけまきをこ入るおらう  
お玉塩うらうらるるの蝶  
霜 白 霜 白 霜

白髪ぬく枕のいやまうら  
入るまきうらうらるるに  
あつげまきをこ入るおらう  
お玉塩うらうらるるの蝶  
霜 白 霜 白 霜  
之道 珠碩

五十八

五十八

かり掛しうか〜〜の案  
 河内手作の代のう〜と  
 麦の小〜ねをも〜く〜  
 齋色し一志き帰る蹤も是  
 願わらずや急聲の鳥  
 と〜〜蹴め帯美しく細く〜  
 久〜〜き詠め出さぬ〜  
 山〜ののの〜  
 かふと客〜  
 月〜け〜  
 胸も〜  
 物〜も〜

翁 是 翁 是 翁 是 翁 是 翁 是 翁 是

又も保生の女侍も〜  
 時〜花も〜  
 昼茶わ〜

翁 是 翁

美〜〜  
 舟も〜  
 舟〜も〜  
 瑞〜〜  
 珠〜〜  
 赤〜〜

翁  
 成秀 路通 文章 惟然 猪麩 正則

石の多き石の書けきよむ  
 影の森を足してききひひ  
 ふす月ゆるしき対向り  
 拍子木子物ふ伝のあつた  
 流を原とてつ答の大作  
 月影千の如く墨の白の上  
 只ちりりきりす  
 細くふはらるる秋をあらう  
 繁の白髪をとり尺けり  
 手(の)もきりり友の如  
 きーの身とをきぬ喜の  
 きの栄木のいハ芥も尖る

楚江 騰重 葦香 鬼峯 正秀 別 重氏 重古 菊 子 則 睡

五十六

さやくとよのまらき春  
 あけきつたあさうらハ戸を伝  
 いらりの山りりきり木  
 汗らき人ハうらりきり  
 せめてとけりも松管放さす  
 風止るきりりまはれ舟  
 只ーいふとよのむ後  
 けりハ古く初いり伝  
 月尺をゆしとやうし松立  
 秋風子細の思焼石の電  
 葉の如く夕さひ  
 支能ふる子ハいりり

正幸 江 峯 然 成 通 菜 学 峯 通 睡 通

あふそよふた刀の及ふまらよ  
長橋子照古窓を打とくさ  
時々 鳴りてねるのうらさ  
穢人の不ゆりさきく花のうけ  
南おもしう先をむる若草

重成  
柘沅  
糸  
絃五  
玉

亭の町と殿いぬ物一とて  
一吹風は本堂走りやう  
役引の勢うめを川とて  
裡を拂す藻とてのろ  
まのく戸のきとていこる宵の月

去来  
翁  
凡兆  
史邦  
翁

人子もくねい名物の梨  
まふくつ夏経おひしく秋あつて  
とねくくらよふえうわすのそぼ  
何のりもなきゆらふ静し  
里とていそめて午の貝ふく  
むつとてさす年の相葉のまてて  
莫葉の花のまててとちる  
吸物えわのあまされいああち  
三里あすのあまをいえける  
ひまると魚回、男はまうらうし  
さー本付らう月の懸 萩  
若ふらうら若ふらうらうら

末  
邦  
能  
末  
翁  
能  
萩  
末  
翁

一 けりしもの物もささきもよ  
 ちをまらうまふあゆむか  
 火とも一はさるれはあつめ  
 けりしきんこれゆきまひ  
 瘦骨のまき起直うらふま  
 隙をうらうまふこま  
 しく人を松敷垣より清きん  
 そやまのれぬ刀きくわす  
 せはけしけりて路をかぶら  
 おもひ切らう死うらふ大よ  
 青天子の月の影あけ

末 終 末 翁 終 翁 末 終 終 末

一 けりしもの物もささきもよ  
 ちをまらうまふあゆむか  
 火とも一はさるれはあつめ  
 けりしきんこれゆきまひ  
 瘦骨のまき起直うらふま  
 隙をうらうまふこま  
 しく人を松敷垣より清きん  
 そやまのれぬ刀きくわす  
 せはけしけりて路をかぶら  
 おもひ切らう死うらふ大よ  
 青天子の月の影あけ

末 終 末 翁 終 翁 末 終 終 末

本草

支考 翁

破山のけの鳩の鳴声  
痛しま旅の行の壺の油  
残まおそくく種ふの籠  
人の尺ぬ好くハ位物物也い  
こういも舟のゆり起す管  
山下の猿のささる枝つき  
尾張をうつす本名の大根  
破張の蓋破けらハいき  
可けけしくく只鳴の壺の火  
昔々のうまく人を尺知通  
湯の時智のよ 暮の月  
糸筒を知り念する秋の風

史邦  
吉来  
野重  
舟  
学  
秋  
箱  
本  
学  
音  
箱

虫の鳴く小舟をこくく  
岸を松舟人もあらうく  
舟あくくくく松舟の喜  
水の方名狭さくく舟の重  
登のかくくく白くあらうく  
酒入のらくく破張けあらう  
物のけくくくあらうく  
くくくくくくあらうく  
縁おとくくくくくあらうく  
扱きくくくくくくあらうく  
けあらうの好くくあらうく  
かけあらうくくあらうく

秋  
本  
音  
学  
秋  
箱  
本  
学  
音  
箱



沙市より西へ中々の門  
 夕月をとく一見習ふ山の端に  
 冬に佛にたふし阿まこし  
 垣上は湯屋のふれ花吹雪  
 小堂のむらさきの干指かざれる  
 傘をさすもあまの老を話やれ  
 経一巻をさしぬ齊のり  
 衣をきき掃取らぬを袖に  
 何れもろくろやてあつゝ 陽光

末 堂 翁 秋 子 考 堂 末 秋

きんぎょの庭めけし 降雲外  
 文草

らくしきる糖の埋火  
 餘いく仲一候茶のけし  
 苗栽袖の砂苗の松  
 法よりけい入る月のあまみ  
 ちりやちりやちりやの怪子  
 ちりやのちりやちりやのちりや  
 戸尻よりつらつらと日下  
 里宿し宿も梅田の丘堤  
 かさつ血をさすお寺の修行人  
 つふ足り多難ふとふ二階堂  
 こもり火のもる舟のわが屋  
 舟の舟や舟をよそよそ月の影

末 堂 翁 秋 子 考 堂 末 秋

青い木を結ぶ猿  
踊場をかりし長束の子  
ふさけし袖を引さく  
冊子に紫束の如く  
今川の武蔵を頼る  
張籠り五百をうけ  
所端の埃掃く  
死をこころに  
月おらの情れ

子 踊 子 末 浮 翁 末 子 翁 子

六十一

内裏の帳入り  
萩垣の川をさぐり  
傘取りや  
柳灯さく  
堀かゝの店  
紀ノ寺  
花吹雪  
代り

末 翁 子 末 浮 翁 末 子 翁 子

六十二

沙天子田京柳丸無引

沙りそ柳を友や手わす能  
 ちりり去民の供物納る  
 りの支る世のゆけ系朝中へ  
 やりの夜るるおもかちの夜  
 お中へすまひ月の人  
 秋手つや折出らぬの枝  
 實入るや系朝の子回赤るる  
 里らぬくある下の河  
 お一割し夜るるれる河へ餅  
 奉加りある信のそ  
 去る川や昇屋の去る中お

示石  
 九犯  
 生来  
 系柳丸  
 乙州  
 史邦  
 玄哉  
 石  
 末

右と心るるも荊棘咲く  
 洗濯る居れりく結の業  
 猶のりり此あもく  
 上る上ら下と物お心  
 られ走る張の襖るる  
 ち幾人う名西を尺す月毛  
 まの海をる鯛の濱焼  
 二  
 屋らるる南るぬあ帰原  
 向あるるしと南吹るる  
 来あるる海つる舟物るる  
 夕とかそくくやハあるる  
 くく後るる夜あるる九十度

行州丸翁石  
 好春  
 軟  
 丸  
 末  
 丸  
 翁

おきえくろくくせきあし  
新なるまきしほまを引あし  
紫の甲おおてしき  
骨とくくくくくくくくくく  
那中くけり瑞のくくく  
月細く少雨くぬくくく  
幸とあししゆき後てく  
花と子とをまきあき  
後のおおきくくくく  
泣くもちひくくくく  
くくくくくくくくく  
去白くくくくくく

丸外末石翁代新春石能新末

かきくくくくくくくく

新

いんくくくくくくくく

弥碩

くくくくくくくくく

翁  
踏通

花かきくくくくくく

園女

あふくくくくくくく

翁

翁  
乙州

六十一

月代や藤より身を置育のや  
菘 菘

桿柳や鞠のうしろ此はゆるか  
秋丸く風千尋にう門  
之道 菘

赤人もと一し名の酒探煙  
去忘くさふら名の振菘  
菘 菘

元禄四年未

名何そとくさるるさるる  
菘通

わさのたつめ千ひくく菓且  
相猫千時良猫通ふ時快て  
菘 菘

何しとすれくさるる張の内  
物とわしゆるぬ糸瓜のわし  
此筋 子川

仁といふれくさるる  
解入るる葉を愛もねの心を留て  
菘 菘

是く古今の秋の奥筋  
流しき系を付し葉ゆむ  
菘 菘

新く和のしるる人様の子  
此里千時傳くくさるる有は  
菘 菘

六十二

解 潘 を く り 月 の 光  
け け と 夢 庭 松 の 家 の 音  
一 ち 色 何 ぐ の 月 光 の 歌  
お ち 八 境 庭 中 静 物 心  
乱 ぐ 海 一 ぐ ぬ 幸 号  
花 枝 や 芽 一 ぐ 足 跡 ぐ ぬ ぐ  
あ の ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
は 石 の 上 を 浮 遊 ぐ 幸 ぐ ぐ  
ひ ん ぐ 入 と 強 び の 心  
け ち ぐ 中 に 意 志 ぐ 心 ぐ ぐ  
い ぐ ぬ 中 ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ  
え 結 の ち ち ち ち ち ち ち ち

通 川 長 箱 箱 通 川 箱 通 箱 川 長

人 の 夢 ち け を け ぐ ぐ 案 ぐ ぐ  
か ぐ ぐ ぐ ぐ 秋 の 色 ぐ ぐ ぐ  
飛 袋 ぐ ぐ ぐ 本 音 の 梅 の 実  
月 の ち 夢 ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ  
朽 ぐ ぐ 舟 の 庭 ぐ ぐ ぐ ぐ  
宿 人 の ち ぬ ぬ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ  
あ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ  
釣 ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ  
堤 の ぬ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ  
あ け ぐ ぐ の ち 代 の 上 ぐ ぐ ぐ  
あ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ  
花 ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ

箱 通 箱 川 通 箱 川 長 箱 通 箱 川 長

くらくらすたふあつらちの歌  
色

梅屋の葉まじりこの木のとりけ  
空海くくくくくくくくくくくく  
空を花の山田まじり梅屋のれや  
志とふいふふくくくくくくくく  
斤陽子虫鳴うきてさきの月  
二階の窓はくくくくくくくく 秋  
板やう勢の流をくくくくくく  
編の葉のひよちのくくくくくく  
散んのけくくくくくくくくくく  
蜀 乙州 珠碩 素男 州 蜀 碩 男 蜀 州

曲花のくくとくくくくくくくく  
おのれの葉まじり葉のくくくく  
すみきくくくくくくくくくくく  
葉のれすきのれまじりくくくく  
雀くくくくくくくくくくくくく  
雀くくくくくくくくくくくくく  
はさくくくくくくくくくくくく  
葉の柄まじりくくくくくくくく  
原まじりくくくくくくくくくく  
えきくくくくくくくくくくくく  
蜀 乙州 珠碩 素男 州 蜀 碩 男 蜀 州

燦々く〜〜〜 谷入口の杉  
掃ききり溜りたる水やからゆか  
石のくぼくぼくをきき〜〜  
肉ころろ甚の先を踏ぬて  
枯〜〜〜 秋の葉細  
舞のふり 舞のふり 舞のふり  
麓深なる谷のねもけ  
ゆらきぬ〜〜 木の根  
木の物かろ 木の根さよ  
振ゆけ〜〜 木の根  
知年の利害を何と云ふらん  
と化すの海の手もけ〜〜

山 通 良 山 良 通 山 通 良 山 通 山 通 山 通 山 通 山 通

月とら〜〜〜 谷入口の杉  
掃ききり溜りたる水やからゆか  
石のくぼくぼくをきき〜〜  
肉ころろ甚の先を踏ぬて  
枯〜〜〜 秋の葉細  
舞のふり 舞のふり 舞のふり  
麓深なる谷のねもけ  
ゆらきぬ〜〜 木の根  
木の物かろ 木の根さよ  
振ゆけ〜〜 木の根  
知年の利害を何と云ふらん  
と化すの海の手もけ〜〜

山 通 良 山 良 通 山 通 良 山 通 山 通 山 通 山 通 山 通 山 通



まゝ物わらひしき世一人  
以ををいんたれはとまうそ  
おれし陶の中戸の山麓  
松千目をさすほの夕日秋  
面のきりしき 苦の 葉  
火を替は岩の洞もみぬ  
必を半千 跡は明 礼  
おとろふ父の白髪を青くけ  
折千のきりしき 物の 物  
入こそ取きり芳好のちのれく  
何々何々まのしき

山翁 山通翁 良通良翁 山翁

晩きぬゆえや初秋のりぬる  
葛もろくく吹かすひくく  
小林をさすぬ花かけ折  
約しき末なる 魚の 跡  
一通りみそれくくもる新  
出するしと背中おす  
歩めしいそれぬ人を思ひ  
まもはくひしき 物  
物干のさうけりて危け  
ん 扱くしき 葉の 小 看  
夕日多の松管落して立歸

野童  
翁  
路通  
史邦  
史草  
通  
翁  
童  
物  
学  
通

泥抄かきしりふし女のきだ  
石佛いりきりけぬえあうり  
牛の骨しし牛 化しきや  
海の法かきしりけしき  
室の八島はあきしり  
みらねくハセうり月のきり  
二 唾の古似するころの黄き  
餅子の友をほしころの南  
系少ちうりけきしり  
物ハハ後きしり  
疹しきしり  
行是つて捨いしり

翁 通 翁 通 翁 通 翁 通 翁 通

ゆり心しり  
供物をきしり  
畑の中はきしり  
扇の折はきしり  
松より登りしり  
やきしり  
海の邊の外はきしり  
おきしり  
きしり  
はきしり  
飯苞はきしり  
佛のまはきしり

翁 通 翁 通 翁 通 翁 通 翁 通

業をほむ契れ一るを眼 執筆

探志

佛阿く此清く敬重しや密也  
月さしくくる意めくは去  
我の忠をそ業を毎行すむ  
多掛 帝一の志免らるる事  
度あぬ子位と人の志なきこそ  
又魚しきく魚の棧に  
竊居し頓折てくは也一室  
と何んをすしめく阿くぬの強  
山侍の侍笑の上の志なきこそ

正秀 呂方 娘子 篇 及肩 楚に 志 夷

狂妻の集を編くをり  
出来合の物振あんと射向  
小を恐くしそは垣の上  
名有るかきそあし初る  
新酒の酸のふくしき  
かきくそあけきハたき一白  
手のみふしきあくるみ  
咲あぬれそ鼻のにおり  
かきくそ平さるる首の志  
帰るる竹のうらみおき  
りそきくそく阿 弱の志  
又くそくく阿 弱の志

前子房 子房 志 翁 江 子 房 志 翁 江 子 房

比あを看て胸をさし  
 臨み物動き替回のた  
 麻の柄をのほく  
 ちさくさくを散り月文  
 名跡を惜む巻の乱菊  
 みらけくや物の字を古  
 こらうくくぬく  
 お雅う男老中の奇  
 一振の舞く西の  
 淨瑠璃やゆい  
 風すらしは例何を  
 肩子房子房子吟松志房菊

百々のうても捨をさける  
 待花ううう六付のむのま  
 海うううう長軍ふる松  
 江房菊

牛形をう蚊の春物く秋の風  
 正植の上う葡萄寺の  
 酒さなるむあうう有力  
 扇四五本さふく  
 うれ竹う屋曲ううう淋  
 葉の老葉のぬううう  
 茂摺七まう新うく  
 正秀 野童 吉来 文草 史邦 祐通 菊

遊りの薬もあむ学さ  
休之日も癒きし心の息よく  
海と心真の境いふせふ  
生干あゝ素あ跡をすし  
いつも素あ跡をすし  
秋きて又一とまきし  
青縁とく信者の月  
分家のあそきし  
痛くつとまきし  
あけとあゝあゝあゝ  
相とあゝあゝあゝ  
人情あゝあゝあゝ

末学初通翁  
末学初通翁  
末学初通翁  
末学初通翁

春月かしくあふ  
う記しとを過す  
約言のつらきぬし  
確子とあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
学あゝあゝあゝ  
明石の城の左  
大あゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
ゆゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝ

翁通翁  
翁通翁  
翁通翁  
翁通翁

又といふからぬ小嵐あひあす  
手持し物見し一葉の閑さ  
油のけきぬ危ハ危をく  
くくくよのちふ解とさうして  
物ハ見ればさうけてそふく  
執事 彦 重 本 学

くくくしき船の積置の影り  
厚くても多程す海地の水  
去る船の中より枯らちそ見し  
端留の火もゆくふ夕月  
ものよれし詠者の店業からさす  
野徑 正秀 昌房 翁

踏道

すくくし氣をとほし物めり  
舞やうとやあしこころ  
あハ音くくくし来し怪し  
くくくつふまも 秋ハきこよ  
まほくくく入洞のとも火  
田の中よりいづれも朝のあや  
其居の札の米砂の危く  
ゆ嶽より雪とふ白濁の松の花  
初雪よりとむる帯の綻ひ  
月影に二階の軒をつま揚し  
暮麦の白ひのむき下種  
陽片や海子の花をさうく  
乙州 画好 珠碩 盤子 里東 探志 游力 彦 通 好 東 力

多風吹去やる菊水の旗  
鴨の翳るふりく影やん  
皇親上多子ゆけり宮待  
恨り。義理を待し涙とむ  
くもれと拵し事との途遠  
くすやうさしとあまの法  
御のさし去る月か廻廊  
昔の春岩屋の地を折現よ  
られ神力の多きを導くす虫  
うと去るまじいふけと踏さ  
白髪さしあすまの命をぬ  
かこまじい多難と縁を理とし

子秀 州子 通州 子秀 州子 通州 子秀

初の中し伸る竹の子は  
文ハ先之史文遊るし  
中保おしやる空のし  
おき入る氣を待し  
子履ふしとむ在居その  
内書くははるをむの如  
墓のか入あやうれ

徑 通 力 子 頃 徑

元福四年の初冬  
ちし  
月くぬけとふは好向よ  
火を折あしと年の黄

斜 如 行

一季の信よりハ麦上松さかし  
かよ 弦 舟とさきし 出せし  
歩 走しう 射と出る 弓の  
山 雀 飛とさけの 小 坊 主  
秋 風 入 湯 け 後 長 け ち  
雪 の 上 を 踏 難 け 子 心  
梅 崎 の 岩 破 け け け 縁  
念 佛 の 名 の 御 け け け  
わ げ ん と け け け 小 納 め  
お さ け け け け け け け  
れ け け け け け け け  
米 け け け け け け け

篇  
荆口  
文島  
此篇  
左柳  
怒風  
杉  
残香  
千川  
霜  
口  
辰

七  
十  
ハ

鶴おるよるハ雲をあらう  
け け け け け け け  
物 け け け け け け け  
月 利 け け け け け け け

篇  
霜  
柳

そ 自 心 柳 け け け け け  
去 屋 け け け け け け け  
物 け け け け け け け  
あ け け け け け け け  
せ ん け け け け け け け  
物 け け け け け け け

篇  
白雪  
桃味  
昔雁  
支考  
以之

三  
七  
ハ



宿<sup>ウ</sup> 宿<sup>ウ</sup> 宿<sup>ウ</sup> 宿<sup>ウ</sup> 宿<sup>ウ</sup> 宿<sup>ウ</sup> 宿<sup>ウ</sup> 宿<sup>ウ</sup> 宿<sup>ウ</sup> 宿<sup>ウ</sup>  
 宿<sup>ウ</sup> 宿<sup>ウ</sup> 宿<sup>ウ</sup> 宿<sup>ウ</sup> 宿<sup>ウ</sup> 宿<sup>ウ</sup> 宿<sup>ウ</sup> 宿<sup>ウ</sup> 宿<sup>ウ</sup> 宿<sup>ウ</sup>

扇車 淡水 桃先 桃液 桃鰾 雪丸 霜 氷 考 之 先

七十一

おも 小 黒 向 花 杉 終 香 ぬら 院 和 以 以

扇 丸 後 考 露 霜 解 丸 後 味 石

八十一

河のたかハアノ新海を志す  
了はふひる門の舟  
千もの遊こゝろ一対  
鳥のさうんして尾ふ小  
咲志子松子のさくらを  
杖を杖して絶るここの

松

水舟雪先石之

は里をらんを田面や冬  
まろしてほそく松の  
いふきんちん一種の  
はく松こむ松のまき

支考  
冷水  
白雪  
雪丸

海しこみそを岸より  
松の岩花門のり  
小地松のあやも松の  
松のまはれぬ下子の  
松の拍子子あしは  
女孫をいのる九世の  
従人子めし作こす小  
ゆ〜松こ〜久く管の  
松の子れ親を君し  
きりて付くる松の  
空船のりて夢の  
る〜の松ハ松のまき

若雁  
柳隼  
扇車  
以之  
柳先  
柳後  
扇  
者  
瑞  
石  
丸  
舟

花より霜より雪より雨より  
 春よりも夏よりも秋よりも冬よりも  
 朝よりも昼よりも夜よりも  
 月よりも日よりも星よりも  
 雲よりも霧よりも霞よりも  
 風よりも雨よりも雪よりも  
 花よりも鳥よりも虫よりも  
 木よりも草よりも石よりも  
 土よりも水よりも火よりも  
 金よりも木よりも土よりも  
 火よりも水よりも土よりも  
 金よりも木よりも土よりも

之 桃 水 之 後 先 經 丸 考 菊

さいむけの宵中のふりをとて拂ひ  
 きれいゝの法を神 土をうり  
 素湯にうつおさ尺ふけを呼ぶ  
 荷をねひあひのしをえ 商 精  
 免さしとりの向の方此は片う  
 板の糸の 心る 石 新  
 念佛のすめせらる 城の友  
 まさしく度の保せめし度

之 車 後 雪 水 先 隣

通分信庵をかく赤武より赴き  
 まつとを懸田より  
 多仙やまのりか摩子のとも帰る

菊



交虎を足さんと人のうちひきて  
升戸の端をいひよふまきんを  
涼さの縁を敷て月を待  
むしつらむとらむけに雲をす  
らふしたる松のくちの尾をすて  
神より足えつるこふも子ら  
修政より紅粉けらるる花を  
長まよやわつり二り 霞 酒  
降らすおまよふ雲を飛け  
あひまをさくらの雲にま  
ゆるりくくめくくの心あは  
かきより扇のかきあけし

扇 不 翁 芳 不 瀑 芳 跡 翁 不 瀑 翁

八十三

まのしんたの枝の拍をあつ  
きおもく足ゆる船息の上  
玉うのひらきつるいのみ  
あはひひしは 神のそ玉  
さくそをかつるを提してつま  
飯のこころをぬれしける  
月影と終花とくしてほら  
ぬすらふもあはれな秋  
朝の若すまのちのちを  
あのかししろうさく  
舟の留を佛の石をさく  
楓 樞 翠 の 板 の うさよ

芳 不 翁 芳 瀑 翁 不 瀑 芳 跡 翁 不 瀑 翁

八十四

ちりちりたる嵐のゆくはたさハ  
 石苔のまろく月をさへしめる  
 見多れはは物さへおひくも  
 かくの中をく 結すまをこし  
 花あはれはむさふあまのあはれ  
 海へもまへくこころの 去  
 瀑 芳 翁 不 瀑

以上四十句

元禄庚午のま本の中へにけりも  
 さくらんどのまをくしあはれはたさし  
 おもひはたさく同じまは三百六十まを  
 とも祖翁の相まをくしあはれはたさ  
 不見すともくも後作はる思ひまを

岸へきたりとも

うらやみし浮世のふた山休く  
 雪消 残る 細根 大 根  
 人見のまをくかまをくまをく  
 翁  
 句空  
 去来

芽斬りくまをく三葉を茂る柳の枝  
 ちりちりのまをくまをくまをく  
 蛸牛くのもくけりまをく角振く  
 人の涙くちり物瓶まをく  
 まをくまをく三度飛脚のりまをく  
 丈草  
 翁  
 去来  
 乙州

ゆあより) 光る如くは良のま  
信りまわれしいさゝとる人  
あよる友とてさる文とわら

翁

文章  
許六

おく座もあゝとる木の梢も  
おまゝにそよこくみの虫

露川

翁

そらゝの海や波てあもみら  
一夜走りゆく張笠の雲

翁

李由

木可く一尺もをちゆらん一守  
四々五々の時向 葉 月

規外

翁

ゆきもあゝとる秋も葉虫が  
あはさるきあよ一もと

翁

如行

能譜一葉集附合之部四

古學庵佛号  
幻窓 湖中  
坎窩 久藏  
披 編

元禄五壬申

其多如餅工夢する様の先  
りそ去らる一昼の所く  
善父入ハ只義入とくそくけり  
わくきみあうり第一持こ  
むく形内状く二つてあ  
風と吹ぬ手毎のなまはら  
考



烏  
 雲の倉すくうつ舟れ重き  
 甚多れ百千も居るきあしひ  
 とちくしとさする物をみちやる  
 瓦うよれは能く朱 然  
 二三手まのハ管れはそとく  
 雲もとや——く尺ちふく虫  
 中あうそけ種つける雲の月  
 蝶おるきぬハ角力丸の帯  
 今雲の田一ゆくや——原の筆まて  
 夜明の星のまこひしりけり  
 法師の空陸命も花こころ  
 白ひは——と紅の露入  
 考、考、考、考、考、考

二  
 陽春の傘をす側りも入り  
 手紙と持て人の名を 句  
 本籍、如れハ村の——が——  
 雲をとらけ——と雲をつ——  
 松風のすん——と吹 松雪こ  
 枝ふり、砂もと 告の門 鳥  
 湯ハあの中——と帯るま水研  
 馬一匹子、端とまを砂りけり  
 小瀬市の対う——たる車三人  
 痛、多けきハ女房とくも門  
 ちこり、清——の月の入——り  
 何の枝——枝 枝の 是  
 考、考、考、考、考、考

二の丸の芝うらやぐ垂屏風  
向とあうらして行人の節々  
さしとて縁境の舎を咄はあ  
口とつひしてえくす若堂  
足跡のたもとさうらに咲おひ  
き片を裁しのひる春柳

多きや小館のうらむ二段漱  
柳とすささる岸のかり株  
足知らしてきくうきれもえか  
刀の柄うらうらて此第

湖風

菊

沾蓬

利牛

舎傍の枝をけしる幹の月  
倉之柳しおふ雪の友とら  
小楢うらむ本標のた也し  
踏一文うらふ秋をうらる花  
菊菊の色の足ふと改らぶ  
あうらの末を履の巻捨  
尺のけりの子供うらむいよの伝  
古ふすうらうらと人飯を  
ちさうしてと砂坊をけりく原  
露を焚く澄り晴る  
月影の向い佛の基  
めまう人深る昔の節

風

菊

桃

牛

菊

菅

良

菊

牛

隙

菊

菊

宵掛の峰ののり花の雪  
うふと時をくきあけみ

良風

あのみちい松と楨や字の餅  
菊やうふれー葉多の火  
明解きの大礎（いさか）  
山の阿あいの隆あゆみ  
糸の平月毛の物おのり  
風いやうりまれ（ゆき）  
侍事にお撲おあめい（れ）  
帯たころくき一金めい（あ）

角 雪 角 雪 角 雪 其角 角 雪

霜きそ初微籠（の）南堂大空  
豆おふれいあ膏のこのあ風  
海きやう村やあふ（れ）  
利やう（り）志の紅葉  
まけ軍功表を引（て）駒（り）  
ふ（れ）い（あ）い（あ）のあ（あ）  
尺屋（り）て故帳（い）途入月の友  
危（い）の終（る）をす（る）小房麻  
一面（り）い（あ）の志（は）あ（あ）  
日（あ）永（く）あ（あ）の（あ）  
暖（く）子（あ）の（あ）  
お殿（あ）あ（あ）い（あ）

角 雪 角 雪 角 雪 角 雪 角 雪

船を浪よこしこゆのたて  
 堤灯火ゆる河の入り  
 女房ふ米屋の専まこやふ  
 言田の喧嘩をやむし  
 友をふそよの縁の枝をぬし  
 多し多に風の石草へ木  
 牛の子はあやせつて市中  
 江の枝葉の田舎 階尺  
 とのあうと夜に入力の多船渡  
 いつこととつくと略のゆくとん  
 頼らちる四ふお草の素の素  
 十人すとのひる万 兄 弟

角 空 角 空 角 空 角 空 角 空 角 空

一ふいハに戸を尺とつる小言の  
 みくくく一返して神の門あ  
 業よと未末を柳一むのけ  
 三人咲ふ妻のわくくく

空 角 空 角 空

芭蕉庵舎

風俗のまこと紙幣や時  
 旅の草鞋よりの赤の空  
 砂川のひきまう又答めかふふ  
 門ちりひする醫者の素おさ  
 月の夜を尺くぬぐと喜し  
 志ろおぬ瓜をくハすし

涼葉 角 青山 骨良 湯子 嵐扇

唐素姚のまををわびさるる空の才  
 ぬるみいひのいとまむ陸尺  
 へのめも人ともてしむ契るし  
 ころもみりう飯名子名を去  
 け糖を痛し顔をかぐし合  
 木賃 海しハ不致をさすう  
 入うけも 細ふ言妙の節の月  
 壇をいあて 言さす人  
 知らるるふし隣を白を扱おぬ  
 小船の又をさ送る村 し  
 け花子お名海やとめけむ  
 寺のくれ本をさのすき水

然 景 子 如 山 良 怒 誰 翁 紫 嵐 雲 水 然 水

入物も田路りいひきて牛 荒  
 かううをきけハ乞合を果  
 長うぬ髪人冬ゆ受変  
 ちの寺くれし隠居者し  
 火桶すし紐ぬ瓶の器し消跡し  
 昔まの粉ふしし 聖の振  
 返りすぬ手紙ハ掃て拾ぬん  
 おとけし点ハ名のおおし  
 昔まの風をいひ付らひせのお沙  
 先々私う不秋のよくれ  
 柿尺女の宿まら尺由の月  
 稿うつれて小舟うさむ

山 翁 良 然 紫 雲 景 子 空 山 空 紫

豹の尾分さけくろ旗の重  
碓氷の岩より跡の河  
ひふましくろ子中をされ  
まけん本一丁酒中さき  
やよやよし太さき送る世の言  
さあさくらふき人子怖さ

聖 榮 然 子 良

終つぬわ夜をひきくし虫の色  
おのこれくと地割る止  
外流しきある月におきく  
廊一ひにまきゆく板の石

史邦  
沽圃  
菊  
真可

たやうとく酒の息子の智をきて  
栗丸をきく川上の山  
ころくと形のおのき石捨ふ  
さきりぬれハ石の麦丸  
西さきとらく咲く花の世  
祖父のゆくと栗丸をつく  
子洲のぬきき神の心を嘆て  
信るをかくる寺一の世  
ぎししとさきふはさの傳め  
尺書をとくしてめぐるあき  
跡指を戸塚の太の傳る鶴  
後殺病のとくしきのさる

沽 可 菊 爲 可 菊 沽 可 菊 爲 可 菊 沽

すんすんといふ代々いふ花の色  
光りつゝいふぬ侍娘のまゆ  
まゆ風上吹きわらうと名流名  
質すすふりつゝ百あめ家  
以る所く獲る魚を化粧し  
薫しつゝつゝ白骨堀の想  
様去厭能あきそつゝつゝ  
并當海とくもとの居る布  
くみろのれ休後子宿をき之し  
名古名つゝつゝつゝつゝつゝ  
悴つゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
彼をぬつゝつゝつゝつゝつゝ

比可翁 比可翁 比可翁 比可翁 比可翁

お志とぬの上さく風はあつた  
あつたつゝつゝつゝつゝつゝ  
つゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
つゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
つゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
つゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
つゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
つゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
つゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
つゝつゝつゝつゝつゝつゝ

可翁 比可翁 比可翁 比可翁 比可翁

帳子ひらくにすきや 特の春  
病一外を稿のことば 賃

史邦 翁

養の種に醬油の饅をかよる  
夜市に人のくろくた月  
木刀のきりしり居合ぬ  
二階よりこの音ふる者  
言さるゝの音を吹きて  
石丁多れハ等路ちの鐘  
手廻工の野老をよかん  
吹くともども中けぬ小松魚  
肌をふく味の物系春の山  
秋入おの筋寺いこやう  
壇演と降つてよろる宵の月  
空位やあつしちのいさう

水 軟 水 軟 水 軟 水 軟 水 軟 水 軟 水 軟 水 軟

持多の新判力を踏くさう  
去くく家のとくさふる物  
花の舟人一尋きふおまし  
小姓の口はきふ二月  
竹橋の内より霞む岸穴  
うのきさくは役といさう  
夕暮り洗濯賃を投述て  
とりのりちり一組母の吊の  
槐うらゝきおれおしきい  
以のりさうと翌ハ好むん  
夜遊いの文て体する切まも  
百里をやり船のきぬし

水 軟 水 軟 水 軟 水 軟 水 軟 水 軟 水 軟 水 軟



枕よりしむ休材木の行むもひ  
 よろこぶそとれぬ中ハ生 登  
 いふとけし治る金あふ月ひ  
 昔ふをやらして時のはりたひ  
 柳子極しつり付るるし  
 降子垂る 宿之のふり  
 水南雲海やめりまう  
 二歌三日は 終るゆりき  
 青く芳野やめりめささう  
 百姓 やすむ苗代の心

水 飲 翁 水 飲 翁 水 飲 翁 水 飲 翁

草庵懐故人

名月や海に市のくれを待 酒子  
 窓より松のくぬ虫の音 翁  
 秋を深し寝るささる石の色 千川  
 まさあふれぬの海のうらり 涼葉  
 端々ぬ鼻残やふとさう 此筋  
 ぬれハ坂のにそえさ 流  
 猫人の矢矢のけよとまを振て 翁  
 青くあふりさめちるんく 川  
 入口は澄ゆらうれとよのむこ 筋  
 きりさひ磨の鈴板もとく 子  
 舟こそう様くハのくみ 紫  
 好く急こあまのしハ 子

伏見かしらも之袋の底抜て  
免のこのふも詰あし 秋  
月影の管あしを思ふ鳥帽子  
履の舞の古心しる 家  
花咲ハ木守の在引すりて  
わろくもくぬまの菊風

筋 筋 川子 筋 筋

初葺や中よりぬ 秋の露  
まきまきしきり 宿の菅川  
野分より居村の多地さやう  
さしこむ月と露 瓶の 蓋

篇  
袋水 史邦 半落

塔付を餅ふほくのそ 秋  
押さこころの草の心ふと  
とよまは出村ゆきうたが  
秋の露の宿の洗ふうの宵  
井田の菜を思をく石の上  
やさしきまきと咲のあしこ  
よの秋の露思を思の丸く物  
物さうらうつつき足音  
月影の懐のほり久く新大臣  
子端の懐のほり久く新大臣  
狗歩年あし起さうと秋の風  
春より春を思を思の心坊主

筋 水 筋 水 筋 水 筋 水 筋 水 筋 水 筋 水 筋 水

花かよわかちと尺〜〜〜とよよの  
 ほうとよおしほをのほ〜わの館  
 二 春風と吉鼓のゆの館を  
 春のあ〜す伊丹花 白  
 琉球の砂市冬のおも〜  
 是れは隙ハ所けん物役  
 尺〜〜〜と色付あり〜本意の  
 嫁入す〜〜〜とやゆ子引  
 袖ぬ〜すは帳子の巻さ〜  
 月と〜〜〜き響油の箱  
 子赤き百石ふれ門〜  
 ちり〜〜〜とけ〜と意良の坊方

箱 箱 水 茶 箱 箱 箱 箱 水 茶 箱 箱

か〜〜〜と度けも〜〜と係面  
 尺〜〜〜と尺〜〜と牛の〜  
 出店〜と又も信居の〜  
 干物法ふや〜精色〜  
 手拭の〜〜〜と〜  
 旅荷と〜〜と板敷の上  
 人つ〜と毛利細川の〜  
 春〜とけん〜〜と〜の〜

箱 箱 水 茶 箱 箱

春〜〜〜と〜物と〜  
 提〜お〜〜と秋の〜

箱 酒 登

昔の月柳のころをかくよきて  
坊まかしの先き立を  
松山の橋は流るゝの吹く  
焙爐の炭をいす川舟  
祇園の湯をいす小豆粥  
あいうべはうんとは油子  
掛念の交りやを替へて  
嬰の庵に尺をうゝかき  
空堀り山麓麓の中へ  
正寺安のむ風の静さ  
月のころに先き立を  
き地をいす神おきえ

嵐葉 水 翁 堂 水 翁 堂 水 翁 堂 水 翁 堂

倫すのふ花の雪の月夜  
取智のお山のまおき  
弓はめすくまをいす  
二 福とくすの海へ  
所中のまをいす  
吹くころす  
草之袋に地を踏  
伏尺のまをいす  
玉のまをいす  
香法に  
山依を切し  
燈持お

水 翁 堂 水 翁 堂 水 翁 堂 水 翁 堂 水 翁 堂

つゝ合ハこれ上戸のし飲所  
 さくまのとあつれ珠こ  
 のり物し和當ハ礼平のり  
 主と免し所は是の大日  
 横揚る名田と書く人の節  
 むしり片筋と録さけ細く  
 不所は地經解の節の本総市  
 杉葉をくえふと去可の虫葉  
 宋五外人々これらも也見せん  
 きしのおろり子きほひも

景 水 翁 堂 菊 水 翁 堂 菊 水

新株や各田の上は秋のき  
 草うしる多し代多る 厚  
 衣襟の襟をすのきうて  
 妻も子もあつるそのき方 雨  
 古戰場にも都のしほも  
 志はし足送る家客の室  
 さしほの門の柱をよおそそし  
 書をのめれハ解と入 虹  
 水を箱上肩休するところ 弓  
 水地えくるる房州の傳子  
 解法女の逢也 ちやうちの上  
 趣りかさふる鮎の桶 漬

酒堂  
 鼠竹  
 菊  
 小鯉  
 鼠葉  
 壺  
 竹  
 壺  
 鯉  
 景  
 昌房  
 西彦

小竹の内伐りこふ幼  
籠もつれを月待の意  
松子とほりて流のらさき  
ふといわく三方の鬘斗  
花のけ耐きう瀉防らん  
檀こく竹のけうる 去 毎

臥高  
探志  
游力  
野徑  
去来

十月五日許六亭無り

くさくさく人をもとくはれ初めの  
中を仕付くら麦のゆへ去  
油をを交ん小粒の味して  
汁のあきくはれゆの風をれ

菊  
許六  
酒堂  
出水

帝の月おく入行と古  
先工丈する故帳の弱や  
才計の傍書中を移れ  
焼こくくく小流の味  
糖つむきの紫をのめく  
糠磴をのほり素白の入口  
半分の強にぬ人もあやして  
和初めのけし楯の味飽  
和言をのめく和の味は  
小く和の味をのめく  
八月八日船中一とふ小船  
焼山くくくの味をのめく

嵐景  
執事  
水  
六  
堂  
水  
六  
堂  
景

歩装すくくけも花の本うけを  
行くと長軍の朝の卵ころり  
ま深く遠志の家妻あつりや  
高麻魚を海へ破すの  
さしとくと鯉一わすり手奪て  
歌君くくく長持の上  
燈火の影めつりき甲侍  
山ねとくきん山をわつ高  
吹巻を手魚のま焼ゆこれ  
尾目りかよふみすの女房  
いりやの丸巻もまのいぶらす雲  
野道をうくえし出のりりまの

水扇六堂水扇六堂水扇六堂

くまの島田河巻の小方丈  
香のよとくく如狐良  
一すらしもまふや柴のまふ花原  
海へくくく高招浪の坂  
宗長のう記寸白く早の伝  
原くすくくくむ百姓の家  
せのまふまふく廻る所糸糸  
七十の誓のこくふくくく

水扇六堂水扇六堂水扇六堂

浄六亭無り

二日ゆりー宗澄の宮意系一斗  
宋玉外戸の亭まの仕合きくし

淡足千言と鳥のつくさく丸  
縁館あふふむむふの里  
さききあはれよのほもつとひま  
まはさきさき七とさきさき  
月のひらけもあつた餅  
築地長軍と典ふのやう  
お玉ちほはんのむねさくし  
腕のまゝとる落千作の子  
あふのさか意はくし  
むし一鳴千勢即位する  
きぬくハ宵の踊の海をさへ  
東大子の月をすきき  
酒堂  
許六  
菊  
六  
菊  
六  
菊  
六  
菊  
六  
菊  
六

青澄の板千やとさあの方  
二人の柱杖は先くはく  
床うけの提灯志めすお花  
はさくしとる星川の橋  
村をむ田面のうねる  
塚のさきいぬぬの石原  
お花信の沙さめく河あまの末  
くをぬれし今川のあ  
うつり浮橋の風をよみ  
又ささくし四玉ゆりき  
お花さめさくしとる  
よるれしとるさの粉  
六  
菊  
六  
菊  
六  
菊  
六  
菊  
六  
菊  
六



了士をかり悉くきし戸のそ  
 月夜子梨を洗ふとみわし  
 火とくしと破ゆしと子修を  
 先積可くする年の物 朱  
 一つ十とと門の瓦子を海に  
 音観方子かく崎を足る  
 くとやと学羽折を足連立  
 車りの捨子流るかく  
 と一垣子木をゆゆの堀の内  
 夕ハ赤くむる二月 菊  
 初花子伊折の蛇の糸を糸  
 柏樽よりやく字川のの上  
 景 菊 六 堂 菊 堂 六 景 菊 六 堂

支梁亭口切

口きりに堺の庭うあゆまき  
 笋尺とよ美のそら 露  
 山雀のさし強くふそと水  
 秋の形すのきんくいの 取  
 旅人の歌の月のめり  
 大戸をゆけとむる 裸 菊  
 露の玉子の良を青 梅  
 何とと子梅を端初つ  
 みととと子六田の板より 桂  
 うけ葉を欠くお豆の 汁  
 支梁 菊 利合 鼠 堂 水 竹 景

こぼるる雨もまほしき城の羽  
檻もふくくつ虫切の標  
たらしくと陸路しる石の上  
酒し乞食のまややすふ月  
行雲の長門西を秋立  
あやうし朽けむ一縷の清  
あやう入節を流の百半床  
崖の二葉のちりてはゆのゆく  
朝をハき季のし柳の思ふれ  
吹りやうさうし舞かきの音  
吹初て春のふもよくと猿こ  
まの涙の枇杷のいすい

合 堂 水 葉 壺 梁 竹 案 合 壺 翁 葉

凡早しと預まきとあふ旅の初  
きよけりしは逢をえつ社家町  
あさうりに鶴と音あを音  
みよしの房北あふ川に  
あはふの綿の帯や肩守  
らん黄たんとつる門あゆ坂  
波たふの物考し喰ふ音の月  
上毛吹くまらわりの響  
谷傳ひありし可けり竹代  
方刀持けりし二こころあふ  
物言ふすしれ勢におるし  
壺やかしく丸葉の

案 竹 壺 梁 竹 案 合 壺 翁 葉

菟さう 湯室の所の人通る  
まゝと 菜のわの神を 瑞し  
執事 二美

木ろくろにうめを官を大入るは  
毛をいく鴨の皮のすくまふ板  
掛乞の中程をうすくろくろを  
雲くしハ本候たくろくろ  
梨の枝おもしろくぬハ雪の月  
梅子いろくおふ茶かろの皮け  
秋風く 架拵の解のやと  
角のくろくろ 梁のくろくろ

荊口  
酒堂  
翁  
此筋  
左柳  
大舟  
千川  
翁

六月のりも照はる 板の木  
子ぬの入し 新境ゆまると  
架油をくろくろ 夏し供する 浄土宗  
箕面の流れくろくろ 山 陣  
菟さくの物をおろす 藤の屋  
俵子 豆の葉を志こく 秋  
月代も小くろくろ さまのたまは 疎  
子 縄ひくろくろ しろの服くろくろ  
をろくろくろくろくろ くれぬをさくろくろ  
雪の上くろくろ くれぬをさくろくろ

翁 柳 筋 川 壺 舟 川 筋 板 壺

あきよしぬハ錦をとおそそ  
白頭きしうし戸新  
中頃の破りゆのま棒さけし  
内ハ御子皆拾うし  
嶋吹ハ板の宮をさしと  
板のほらに急ぎをぬる  
すれ戸子袖口あふゆの袖  
果ハこれし撫子の時  
位知して古態あふゆの物  
師念代しし強念を  
門（すの白のかき）紙破る  
むしあふむれとらうし  
嶋

瓦峰  
翁  
酒堂  
嶋  
翁  
里東  
嶋  
東  
嶋  
翁

いしけをたれやかしらばの扉  
梨地あけふ火のさけ翁  
名月と雪舟の松北一さけ  
とーの米を宵あふとらふ  
花千束しあふを佛法あ  
まハかきしぬ三梅の人  
嶋の底千探る杖あ  
あふい衣子昔着あをく  
きんとし娘ハ存の物あふ  
忘のあふれを足し和嶋  
珠代のあふあふし田ハ  
あふ徳ハ侍吹してあふ秋風

翁  
東  
嶋  
翁  
東  
嶋  
翁  
東  
嶋  
翁

夕有る為鶴をたふる子路の音  
 舞茶一はする蟹の如く入  
 麦めし文の飯を永くけし  
 陶引する川舟の袖  
 怪子子風も涼しき中小姓  
 卯の腰返るのきを去る者の文  
 美しき春の句心を似せし尺の  
 人同子とらと引多くの珠  
 一息子地之権現の花さくら  
 怪子子のさくらを去るきりめく  
 雪のそののころの百の心  
 果且味を鼻残の百

角 壺 角 壺 角 壺 角 壺 角 壺

十二月廿日即興  
 抄すくし節入 採れ梅山系  
 海とむすの初望の右  
 月子とぬ浩く音を引く  
 雨折のよき子ゆふを強ふ  
 夕月の花ふりけり 絶屑  
 出代さく秋そをけし  
 四子ふりきぬえいゆ植の音  
 肩の音ふりけり 親  
 足え子と来しゆんけり  
 茶を煮く廻る海の子索

角 壺 角 壺 角 壺 角 壺 角 壺

二張の反紙尺一すく枕一  
はめよぬ猫の身をひきよめる  
あひしやうとさきしぬ嫁の息  
現は度と意やせうと  
夜の雨のさしをさくさくむ  
三寸の跡を志しむ 啓  
まひとつと瘻をさくやうの月  
葉よと菊よと手ささくら夜  
おろつあつおあつ友を秋の夜  
きみ子水もゆける戸極  
山よのこころし丁らに静し  
あつうつうと合款のい言

山 隅 崇 角 味 翁 角 崇 山 翁 角

かけわく山探る床のいよれし  
おとくぬ船子屋の以侍  
音もやと骨洞穿の空うら  
真うき子ゆいよとを焼  
尺ぬふりの主人の志をわかれ  
すくよ半かかきうあうと  
現しよ早を皎く秋の月  
あつうはつぬあつぬ  
お草を近江流うらほ山子  
息あられ子えこしうり  
あつうハ湯邊うらあつう  
あつぬあつぬあつぬ

山 香 隅 崇 山 角 翁 崇 翁 崇

付さしと申してさうも柳の色  
柳葉の影のまじりて云 遠 山 濠

深川芭蕉庵

自代をいそぐやこむむむむ  
小松のかしら梅も冬 山 翁  
牡鹿花菘の遠百の字に九て  
多き白く海千の如く川  
泊之小松の板屋と一里 遠  
るる千の如くさおとさひの懸  
物さる懸むむりり五月雨  
黄際るるるる 南ての 花 川  
此筋 左柳 酒堂 海動 感水 川

笠とれのお髪ゆるかき鞋をは  
ふらふらと急ぐいさか大 海 翁  
言節り年穿鑿とあつらふら  
居風をくくくくあつらふら  
胸くさし移るみくくくすけと鐘  
傍き病のあつらふらくくゆの  
伊豆の海みささく船を漕入て  
一夜の法り宗青定 翁 川 水 勅 筋 柳 翁

廿不二や五月毎日二里の 旅  
茄子小角豆とあつらふら 志 翁  
志 翁

鷹の子死を在り瓜の如くして 菊

空菊の疎をりや活大相 許六

みさし 露の如く 煤 菊

月々ふく音うらまをこぼして来り 涼葉

手も花をり 樹の花をむ 酒堂

猿子のをやうに 露をのこりし 素堂

音の由より 露の室よりして 菊

よの中をいふ事してうらまを 共角

小誓情けしあふらん 音の音

改中をうらに 飯の如くもの 涙石

ぬきさうの 露のひよの如くして 菊

露のうらまをり 音 音船

筆をいふを 露く市の中 盤子

いれと白油に 出湯の如く水 史邦

竹槍の葉に 月を月の中 去来

袖すく 音の如く 又草

元禄六夜酒

やうをうら 河縁の状を志す 涼葉

まご 音の如く 音 千川

川音の病をり 音の如く 菊



うさむねのゆるふ葉の柳  
 秋風のむらさきをささぐ葉の中  
 虫と向ひあつた目もあつたあつ  
 机をくく瘡の方をこつたあつ  
 多か平 暮成けし悔めり  
 尾まの志尼ハひさし髪別そ  
 奈良ハむらさきの中さうり  
 掛ささう小袖の敷をももも  
 きの巻扇をも望みのあつさみ  
 尺さ後の源也一歌の志の何く  
 於てさふまをやすや信正  
 出来合くと信誓の料理に麻おさ

宗波 此篇 濁子 紫川 子 紫川 篇 紫川 篇 紫川 篇

三十五

ぐさして所く内なるの砂  
 約有る花の葉物せりき  
 ぬりけのぬれ糸はたささ  
 石をむき居のたぐさささ  
 地元の板子尺ゆつ名苗字  
 夏中ハとさくぬ麻のまをささ  
 寺のひらえハ四五及の秋  
 夕有る板木はりかす堀の破  
 尺よあををさささ  
 先くあつた古俵敷の一纏手  
 是とあつたさうりつ子の手  
 さつ子あつたさささ一歳のささうり

紫川 篇 紫川 篇 紫川 篇 紫川 篇 紫川 篇 紫川 篇 紫川 篇

三十五

何れも字もふふ、海の題目  
三島の標より西ハ時毎 しく  
茶屋の二階ハ酒の標 園  
葉一き殻も文より字をけり  
うらみの文を記す 琴の字  
鳥啖ハ又末の字 塚の上  
字 新字とさむ 巻く人 けり  
もろも巻く 巻くを けり 巻く  
只よふ けり 巻く 巻く

初 葉 前 川 菊 紫 柳 物

かろうさきりけり けり 巻く 巻く 巻く  
菊

まろ子も巻く 巻く 巻く  
紙有いささ火焼く 巻く 巻く  
使のもの 巻く 巻く 巻く  
洗濯を 巻く 巻く 巻く  
わらわら巻く 巻く 巻く  
巻入るの 巻く 巻く 巻く  
巻く 巻く 巻く 巻く  
巻く 巻く 巻く 巻く  
巻く 巻く 巻く 巻く  
巻く 巻く 巻く 巻く  
巻く 巻く 巻く 巻く  
巻く 巻く 巻く 巻く

子 葉 前 牛 坡 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉

けりしと和の浦の初  
秋とや柿ははるる一  
清波とくす子の娘  
去和くす子さかぬ  
狐の襟をさくふ麻  
喜の虫十六方は  
何干すかくを  
智解の一人は  
先手拵る  
むりしき  
丸はすく  
況もと母

良子牛坡菊  
良子牛坡菊  
良子牛坡菊  
良子牛坡菊  
良子牛坡菊

三十一  
七

木橋ふふまの  
足場ふた月  
麻柳ふふまの  
念仏すく  
四と十日  
義かけ  
男と  
病入も  
切株も  
坊舎も

良子牛坡菊  
良子牛坡菊  
良子牛坡菊  
良子牛坡菊  
良子牛坡菊

三十一  
七

五人技持たし志しつゝ、極うぬ  
 夕和（子）を、ぬの、音、  
 務、曳の、身、を、ら、ま、に、山、こ、し、て  
 そ、う、く、ま、り、け、つ、鐘、子、の、勢、の、  
 暖、く、あ、つ、て、も、河、舟、ぬ、水、の、直、  
 利、み、あ、つ、て、酩、酩、を、う、り、以、り、  
 丸、三、季、結、く、く、結、く、ふ、い、を、し、て  
 境、ぬ、の、ろ、ろ、ゆ、れ、を、う、り、皆、さ、ぬ、  
 去、白、く、松、と、權、も、も、の、ま、ま、  
 し、き、き、の、う、り、に、随、つ、鐘、ま、き、く、  
 疲、絶、く、一、白、梅、竹、子、  
 野、坡、  
 音、坡、音、坡、音、坡、音、坡、音、坡

歳入せいであつて、おて、位、  
 終、然、と、勢、う、り、す、る、秋、更、く、  
 ち、又、お、か、さ、す、る、力、の、力、け、  
 只、（う）と、し、の、酒、を、く、ら、り、  
 ち、の、以、佛、く、躬、の、く、も、く、火、  
 吹、む、子、十、存、の、昔、菰、あ、ま、り、  
 ち、や、藤、く、け、と、指、志、を、う、り、  
 ち、ち、し、と、し、の、ぬ、の、ま、ま、の、風、  
 捨、か、さ、す、く、く、く、ち、ち、く、  
 仍、義、く、く、く、く、く、く、く、く、  
 梵、味、の、味、の、味、の、味、の、味、  
 一、振、く、く、く、く、く、く、く、  
 音、坡、音、坡、音、坡、音、坡、音、坡

ふと小舎からつらりと遊  
かえらるるを貫ひて中戸を覗き  
むすしの紫羅をハ若くやむ  
市原子とてこゑとよめくまや  
神おんむす夜々号と以  
月けけし小岸仲宵のきそい  
はるるあむるをむかふる肌  
さくくしと桐の紫羅をす  
まけけ何と茶の鉢古  
水くくあかきれは髪振り  
猫万おるる人そふい  
何のちおあぬエ丈のさくハ

翁、坡、翁、坡、翁、坡、翁、坡

掃月のみさういあくハ

坡

八九百をり雨海柳可難  
喜の勝れさくけりる有  
初番とて下士とあむの羽折る  
肉をよさつく喚ゆ振  
きのふくくおるる月のつら  
狗背うれし肌をさるる  
志ふ林くくハ風とあけり  
除く法とる祖父の信  
銀まきうハけりる

翁  
治圃  
馬覓  
里圃  
翁  
翁  
翁  
翁

煤代志大くハミヤ跡のらん  
 約米の小多一さけ愛ふ米て  
 十里はけうく此よきハミヤの  
 其の葉子少取埋ておまハミヤ  
 ても直打能と門の古付  
 何名ハミヤは沙はた物坊主  
 厚りともハミヤの系ハミヤ  
 多のゆきおとくハミヤのたてゆひて  
 尺よりハミヤの箱ハミヤハミヤ  
 吉野堂気取れハミヤハミヤ  
 序おハミヤハミヤハミヤハミヤ  
 長持ハミヤハミヤハミヤハミヤ

法里黄法菊里菊法里黄法

くくハミヤハミヤハミヤハミヤ  
 縁より一口おハミヤハミヤ  
 概の角はたてハミヤハミヤ  
 漢ハミヤハミヤハミヤハミヤ  
 ちけぬ娘ハミヤハミヤハミヤ  
 月おハミヤハミヤハミヤハミヤ  
 ちくハミヤハミヤハミヤハミヤ  
 おハミヤハミヤハミヤハミヤ  
 伴ハミヤハミヤハミヤハミヤ  
 割ハミヤハミヤハミヤハミヤ  
 まハミヤハミヤハミヤハミヤ  
 引きてハミヤハミヤハミヤハミヤ

菊里黄法菊里黄法里黄法

その川と火入り落すくまの  
花はくちや袖はぬきのもちられた  
瀬のくちらのなる場所の水  
里 莫 治

深川にやうくして

空豆の花はくちくち麦の隙  
屋のまの隙のけりる深川  
上張を通さぬけりる雨降て  
その川と沢けりる水の隙 中  
雨雲の上はくちくちの月  
やうくくと隙のくちくち秋風  
きうくちの隙のくちくち利  
牛 屋 菊 利 牛 出水 菊 孤 屋

咲の仕るくちくちくちくち  
妹をくちくちくちくちくち  
信教のくちくちくちくちくち  
風をくちくちくちくちくちくち  
家のくちくちくちくちくちくち  
彌計のくちくちくちくちくち  
茶のくちくちくちくちくちくち  
此をくちくちくちくちくちくち  
くちくちくちくちくちくちくち  
きりのくちくちくちくちくち  
不承の隙と中おるくちくち

さつら切まをよへりす  
ほろのしるふもあしほちあ  
まわされしるまをよる  
まのちりすらんてふか汗をか  
家を送るさける智基  
そのうちすまのあしをさして  
争貴 論ことわたりたれり  
息災子祖父の白髪のためしよ  
堪思あしぬ七メの思  
名月のうち命をよぶ芋島  
すこしあしあしあしあし  
けしあしあしの通りしるす

牛 鹿 菊 牛 水 菊 鹿 水 牛 鹿 菊 牛

山の根際ぬちりす  
積毛のよそふし風の吹あす  
さしりあしあしあしあし  
い化尺も女子はりりまを  
よのあしあしあしあし

水 菊 牛 鹿 水

十三夜焼やまはけしあし  
小袖の糊あしあしあし  
焼飯子瓜の粉漬あしあし  
女任故麻のかしあしあし  
あしあしあしあしあし

濁子  
曾良  
菊  
史邦  
秋風



こみくふ 風そよぶ  
きり 麦をこむ やぶらぎの上 折立て  
きり 子もよけハ 桑橋の 昇  
松萩もよけハ 橋の ちの 門  
ひらく やぶらぎの ちの 門  
東は 舟もよけハ 桑橋の 昇  
橋の ちの 門  
うす 舟の 麻の ちの 門  
言の ちの 門  
舟の ちの 門  
舟の ちの 門  
舟の ちの 門

出水 涼葉 菊 子 風 秋 菊 水 子 良 菊

こみくふ 風そよぶ  
きり 麦をこむ やぶらぎの上 折立て  
きり 子もよけハ 桑橋の 昇  
松萩もよけハ 橋の ちの 門  
ひらく やぶらぎの ちの 門  
東は 舟もよけハ 桑橋の 昇  
橋の ちの 門  
うす 舟の 麻の ちの 門  
言の ちの 門  
舟の ちの 門  
舟の ちの 門  
舟の ちの 門

水 菊 子 風 秋 菊 水 子 良 菊

枝もく菊の揺ららひきよ  
 花の葉のちこそけしる昔の素  
 澄くかきめしゆけり青  
 花の葉のちこそけしる昔の素  
 花の葉のちこそけしる昔の素  
 花の葉のちこそけしる昔の素  
 花の葉のちこそけしる昔の素

十の枝先とくしけきよのくしゆ  
 花の葉のちこそけしる昔の素  
 花の葉のちこそけしる昔の素  
 花の葉のちこそけしる昔の素

肩の枝ひし朱のお次  
 尺之とハ尺根りりの照切し時  
 花の葉のちこそけしる昔の素  
 花の葉のちこそけしる昔の素  
 花の葉のちこそけしる昔の素  
 花の葉のちこそけしる昔の素  
 花の葉のちこそけしる昔の素  
 花の葉のちこそけしる昔の素

五  
 五

うらみとてや琴の如く  
 ちよとて色も花さく  
 瓜をまきつる稲の湯子物  
 手札を清沙の白人の詞  
 志はしうあれハ瓦もかく  
 持付ぬおた刀を右平がこやう  
 くれハさねくうさめり  
 友川のさや音の激を踏ち  
 是祖のや一右左を尺  
 家立を子米の茶を積まね  
 房と大さうくけほくみ  
 雨心の澄似さう水う

常良 子 翁 水 良 子 翁 子 翁 子 翁

大原の紺屋里より  
 数おなくつあけハ牛と宿を  
 舟のみあそに鯉を  
 初対向六里の松を傳ひ来  
 ちり子鞋のしめけりや  
 釣己も水籠の起すおさめ  
 竿ゆすすめのまの  
 吉風さすす谷の細布

翁 子 翁 子 翁 子 翁 子 翁

秋月廿二日  
 振るはるるれし  
 翁

野(ハ)や(ミ)野(ウ)す(ハ)野  
 高(匠)極(小)節(を)杖(可)ぬ(ろ)  
 行(を)け(山)子(舟)を(見)る(外)  
 取(物)の(餅)を(強)さ(如)秋(の)風  
 (ろ)木(の)安(お)玉(の)家(家)雲  
 洞(の)よ(の)を(法)心(舟)あ(り)け(る)  
 星(さ)く(石)く(石)二(十)八(日)  
 (い)ろ(ろ)ハ(珠)子(軍)の(大)子(し)  
 淡(音)の(を)ろ(ろ)鐘(淡)も(を)ぬ  
 的(し)む(智)松(灯)を(吹)け(し)ろ  
 肩(癒)と(た)る(湯)屋(の)言(有)業  
 上(屋)の(干)菜(き)さ(し)む(と)ろ(ハ)ぬ(也)

野坡 孤屋 利牛 坡 翁 牛 翁 坡 翁 牛 翁 坡 牛

了(ろ)や(ぬ)り(を)内(く)交(す)る  
 綿(買)の(を)ろ(さ)く(ろ)を(神)つ(て)  
 堀(ろ)一(門)あ(る)五(十)石(と)り  
 此(島)の(蟻)鬼(も)も(を)す(る)内(を)  
 砂(子)ぬ(く)ろ(れ)ろ(ろ)青(子)  
 新(畑)の(養)と(養)つ(ろ)香(の)上  
 尖(ろ)れ(ろ)星(と)ろ(ろ)西(く)  
 川(の)帯(一)の(水)を(河)ふ(ろ)  
 平(地)の(を)ろ(ろ)す(お)藪(垣)  
 干(物)を(口)向(の)ろ(ろ)さ(て)  
 塔(あ)り(鴨)の(菖)蒲(と)く(こ)  
 心(舟)用(の)浮(草)を(立)る(系)任(心)

翁 牛 翁 坡 牛 翁 坡 翁 牛 翁 坡 牛 翁 坡 牛

又河津子一むさしの産ふ  
 やこころと大鷲も四つの子  
 母子のよめむねの法先  
 中うて傍事合の信いひ  
 響こころきこふ痛さぬ夕月  
 風止る秋の酔子尾さう  
 解の写子の鏡をいりゆ  
 ち〜は〜と米の扱場のけり  
 月忌ちありのまの孫らにや  
 何おもかた花の三月中時分  
 梅炭の露をさ〜ふまは

牛座坡翁 牛座坡翁 牛座坡翁

芹焼や解梅の回井の柳少  
 こころと〜と〜と〜と〜と  
 職おろす指を延子いりや  
 朽くす〜と〜と〜と〜と  
 了す月夜子解に〜と〜と  
 游らむ牛も尺〜と〜と〜と  
 家おろの山村の証を〜と〜と  
 板のま子〜と〜と〜と〜と  
 母〜と〜と〜と〜と〜と  
 塚ハ〜と〜と〜と〜と〜と  
 口書ハ〜と〜と〜と〜と〜と

子翁 紫子翁 紫子翁 紫子翁  
 涼葉 渭子

和田秋父ともいふる若黨  
掛乞の末のハ詞をゆゝ一付  
よそよとくくつき月の枝お戸  
虫のこゝろて就年の序れこ  
松とすきも念佛のくぬ  
宿ハ粒いのちあうくくおのうけ  
破籠ハさ久ぬくくひすのあ  
雪のあをまかしてすのけふれて  
ハ流つるア一帖の 残  
旅齋や長ぶ五月の氷ゆり  
名跡色のきく安藝の唐色四  
る竹ハ尺くぬ伯母と流く

紫 翁 子 紫 翁 紫 子 翁 紫 子 翁 紫

え米こくく酒の真 辰  
旗立ててあう鯉する雪の月  
きくくまくと朝空くく  
よと舞ハ仮能たま子転ひこ  
くぶあを辰のちてまする  
よの結と揺籠をわめし流す  
葉屋をまきす床のかこ隅  
時をすくやとぬ帳を物うけ  
ゆもくくく心折の物か  
くす雪の上うけふれのことく  
袋の唐もくくくまもの  
折花子子折のすくく袋 何

紫 翁 子 紫 翁 紫 子 翁 紫 子 翁 紫

まゝ松極る下、林の字子

香菊や粉糖のうらむ白の端  
さけりてうらむしとと大根  
夏夜ハ赤をく橋を掛初  
月夜秋の月多そり丸  
雪の秋の病のさんき路  
此一管ハ桑の浜手頁  
七十二ふまを恨み脚技持  
三尺通り意のさしうけ  
涼しきる望田の虫崎うらむ

箱

野坡

箱

坡

箱

坡

垣とる牛此方靴やすむ  
善操千ちのをもとこのうら入  
氏々々々氏々旅の字 Ⅱ  
押浩の沙毛の口を喰うぬ  
路子路成付く歌すま節  
田の中二場をぬ石の手路  
是々々花行く有能なる  
花の附祖父ハめく度命礼々  
傍る宋さすり喜の箱中  
店坊子青の路儀を引出し  
大い起る子のよこさす  
若命を相殺のうらむ藪の岸

坡

箱

坡

箱

坡

箱

坡

坂の流をいふ心奪 矢  
 手よりそよふ足程の杉の可し  
 泣て海をむすくさの 赤  
 翠しくしと梅干風のゆるる者  
 踏ゆす人の蹟を尋やる  
 月尺の親干不足のゆき心  
 とあれて家ハゆふく竹や  
 飯工刺す並るくハ縁縁と  
 仕付し 庭す 舞すの 言  
 田を極るむうの近江の船のゆき  
 了春よあうりー 宵の 津唱

此中意弱不適意句多故不満韵而

坡 弱 坡 弱 坡 弱 坡 弱 坡 弱

終云

生ふるくは川にわつ生海流の如  
 名けハ白く空の菊の 蕨  
 代古の飯屋より舟の舟を足く  
 左風花 梅の 梅を八うり  
 酔の指を折れハ潮の引こり  
 くとと遊てくくす 赤 袴  
 親の付るやうー 醫者の水身  
 中 一き 舞の 庭のくー かり  
 香簪の可くさくさく ね 柳 前  
 旅く物めめくくく 柳

水 弱 水 弱 水 弱 水 弱 水 弱



麻衣をとりしは是なる木曾の谷  
中編の所礼をくゆる風事  
何れもかき下るる海に月清く  
はくはくし軍一綱のあけさ  
造りてをり村を歩みちの海  
まけてをりぬる海に夜  
初やのさしあふ喜ハきり  
修加の路長果の山のり尺の

ひらひらと風引  
あやしのさくさく枯るる  
水風 水風 水風 水風  
水風 水風 水風 水風

宿をりしは是なる木曾の谷  
三味線さける旅の気合  
夕月夜定まらぬ文一ける  
ふす月こそさる秋さふまき  
大業の繁井幾守りさるる  
力まき旅をさるる木曾の  
持仁事さるる木曾の  
沙川をさるる木曾の  
駒の跡十二かきお場さる  
依尺の橋さるる木曾の

四十一

懐くさんて入るる羽衣  
親仁しとふれうきく  
月むの青うし仕せうと巨鼓  
露冷くらし錦ハ破り  
涙あゆとくく(露とまの風  
門のたうハ尺籠いこさる  
舟のりし一却雨の降道  
菰く(露をちす)浮丸  
鳥くふおおおきく(知うと  
雲の洞江の山をなま  
入り左松さるく(由竹 處  
佛(法を)神を(けす)

菟 翁 菟 翁 菟 翁 菟 翁 菟 翁 菟 翁

黒江の小袖ハ襟のあうと  
異洲の系燈を(受)ちき  
舟の浮の二階を(居)す牙  
月を(眺)み(癡)癡を(き)く  
物の一帯(見)ゆ(世)す(き)  
楯子(破)る(袖)の(き)り(取)  
秋の(世)承(し)つ(松)功(者)  
春加(帳)子(つ)ぬ(あ)り(り)  
不(下)儀(し)世(山)の(新)三(位)  
回(令)の(谷)子(あ)り(つ)黄(鳥)

菟 翁 菟 翁 菟 翁 菟 翁 菟 翁 菟 翁

雪やらの雪がいらる政中さし  
 刀の柄子わらふ 拭 霜  
 雪うらし木きりけりあけり  
 秋末てうらる 瑞雪の 境  
 物しハ布子をぬお雪の月  
 研いし 採り 橋の 平判  
 高ききりて 紫の 花を 走り  
 何しむ 麦ハきり 糸うら  
 白櫃の 柄ハ ちん 林 子  
 梨を きりて ちん 糸を 採り  
 焚き 物ん の ちん 糸 採り  
 ちん 糸 採り ちん 糸 採り

良 翁 水 野 水 翁  
 良 翁 水 野 水 翁

藪をきりて 採り ちん 糸 採り  
 出 家 の 物 を やり 上り  
 山 房 の ちん 糸 採り  
 ちん 糸 採り の さ 糸 採り  
 初 ちん 糸 採り  
 堀 の つり 木 子 採り

里 園  
 依 園  
 馬 寛

何きうに月尺のけの葉め跡  
荷うちくしと通るる次  
里

共角

まうれしやえ葉を懐しき  
名際もゆつ陽冷の石  
出代の新物を手まうかき  
翁

毛統

梅らまや通るるれハ弓の音  
去る蹴るを花晴る  
陽冷を吹羽の牛の板ぬけて  
翁

許六

ま風や麦の中細くまのさる  
木導

陽冷いさか花け糸に  
翁

長ふしや音の跡も三ヶ一  
あうしやく結子の細か  
葉をうまの葉のけあきうけ  
翁

利牛

盛水

野に立圍るる母方ゆきる人  
あふ散れを予とあふ仍て能号  
をあしきん古法をきよふ

聲あつて名をふのる人  
宮極の振こしどり  
実まのわゆる葉の戸を付了  
翁

信國

古将監の古守をうらうら

月やその影の本比りのい  
旅人多かれハ折りくらの  
なまきり煙 又の村に暮る

菊

信團

其角

秋池

孤屋

菊

子珊

桃隴

利牛

雪の松折れはくれハ程さふ  
りのあつたおれあふを  
い者を一船に打りけり  
万とまきくハ大なる  
あつたあつた風をふハ  
栗をかきくはて底に島

このふの火相若ふを

菊

玄舟

舟竹

菊

舟

竹

一通くゆく木くハ  
あれれれれれれれれれ  
火とあつたあつた  
物の葉のまきくはて

元禄七甲戌

菊

野坡

梅くハの影をうらうら  
やうらうらハ折りくらの  
あつたあつたあつた

上のふるり子あつる米の直  
おのうらほしとせし月のま  
敷くし時す秋のまひき  
おはく菊のしらし遠き  
娘をかきし人子あまきぬ  
素良通ひ同一はるる細き  
とくハ雨の降ぬと月  
軽なる味舌ふやわ向川岸  
ひもとらしあすお袋の  
よもすう尾の抄病をおき  
菊菊けく子あまきぬ  
初夜を糸掛ら地敷く尺

翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡

おやをとおも子居合一めふ  
所定の法づきと候し花のけ  
門し相さるる生れのま  
らら風子峯のまれを吹起  
只片のまに眩るる  
江戸の右左向の舞臺のわ  
らら子とみれと唯をうす  
方く二十夜のうらの隆の音  
桐の木音く月さゆるし  
門あめし月つて宿るま  
捨つてまきしおもてくす  
卯午子女府の親子探あ

翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡

此其もすしぬ守人  
 花のほほを返す花さう  
 磯多をさしし喜喜の如く  
 魚の如く東の方より来る  
 魚さういん飽候の程  
 未をの言のさてぬ舞用  
 晴くさしきり候をさて来  
 屏風のうけの尺ゆる葉を魚

薄の葉さうらうかけし葉の如  
 箱

箱 坡 箱 坡 箱 坡 箱 坡

牡丹のちんねおさむ  
 みーらねて月ハいさぬ取  
 酔さしをさく酔をさす  
 出さう六橋さむのさす  
 出さしとさるる金山の  
 吹候す枝もおさすは社  
 いのちも葉のさしよる  
 大のさしねおれぬ候に  
 福さうの向をかりさし  
 高橋や曹洞寺のまはとめ  
 傲のさしきさうの向の月代  
 生さうの解ハ解さし

千川 涼葉 左柳 川 箱 坡 箱 坡 箱 坡 箱 坡

青山 川 箱 山 茶

すのこも木をハ先尋——く  
 巡礼の宿し旅ゆきのくま  
 兄より兄よりけしよねま  
 花足んと杏る急中の暖り  
 くくハ梅手さるるお段  
 何しは海踏家の音をと忘ほり  
 ありあくくく民木の塔  
 湯より信衣干布をすらくく  
 堂の破れり入るか  
 さひきき積りのをハきも来  
 老方のさくくハ何ゆの  
 秋鳥季夜の染りかろく

柳 川 山 葉 扇 此 葉 板 筋 遊 糸 川

海原の門をくく月の夜  
 人は其の夢目引ゆあ芽つこ  
 玉を甲れそ美哉んきく  
 学おくと多代さひ——死  
 海あき雨ささく蜂の音  
 随ぶのかきす名並をつくる  
 火よりかやき——門の強物  
 院内より守流川をふ波の夢  
 喉とまねしやすむまの  
 此素ハハよりきく花のけ  
 埴のせいの足ゆき苗

葉 舟 板 筋 糸 扇 葉 川 翁 糸



窓のむらさきを小窓のあやう  
よふあやうけりけり糸 遠  
物々 潮の子雲のあやう  
出雲のお子 梅も起し  
けんしんしんあやう 柱  
楳あやうけりけり又未  
任夏て任持こころぬ破も古  
あやうしんしんあやう 風  
あやうしんしんあやう 枕  
あやうしんしんあやう 記  
あやうしんしんあやう 記

子珊  
秋風  
桃咲  
八葉  
菟  
素  
陳  
風  
珊  
菟

山のうさぎの下市の里  
子雲のけしハ旅のきり  
四の月のましまさるふ  
秋未ても鳥の去れり  
雪の夜の羽のさき 梅も  
あやうしんしんあやう 花  
あやうしんしんあやう 生  
正月の末より 張治の人の  
あやうしんしんあやう 取  
屋の酒のあやうしんしんあやう  
あやうしんしんあやう 女  
此際と利上りしに

風 珊 菟 素 陳 風 珊 菟 素 陳 風 珊

夫んやもくちのハ頼まのうむ  
 能携れ青を汁子きり入  
 尺女よりたぐい家ハ引らむ  
 天よりけてとく一はれをの月  
 中へ花もあふき麦のそ耐  
 柴栗の葉とくうとほきて  
 不くく木より人子まの  
 いそくく一而指し供支  
 葉とくむ自心 陸きり  
 その宮と志とく我はし海甘る  
 日用の玉冠とく籠り 天とむ  
 庵に高は葉の花のさい免びて

葉 風 冊 葉 瑞 風 冊 葉 瑞

小舟波廻り 淀の山を

執事

孫あ

新まのうきとくすぬそ色水  
 うちお故懐のせとくう  
 了時れこりきひしお牧の舟  
 四五多石の和り 立 止  
 方より醫者を引する名月  
 踊り他は信とくおむし  
 金とく口流りくち花書信  
 行しりくくあのをききあをやく  
 葉生とくを止る 寄 あり

山店 翁 店 翁 店 翁

湯のあやわめかゆふ南 幸  
丹波くく使くも能くく啼く鳥  
音摩々声れと利上走々さ如  
ちよわし去無 夢をこ抄のちん  
只 京中へは有るまえけり  
神 鳴のひつくとしは流るる文  
まやくくく少く幸々舞くぬの  
真の能をわくく物なき一 眠ふ  
りさくくくひんひんくくすねた  
来のちり音家のゆめつくとく  
かくくくくやゆ漢くくくく  
いそくくくくぬ殺まをたあくひ

店 翁 店 翁 店 翁 店 翁 店 翁

目つくと巧くあゝ礼障こ  
かくひくく櫛くやくくくく  
佛の木地を流るる糸あり  
くくくくく向ひやあをハ付る  
そくろくく竹のくくく牛 櫛  
胸二帯のゆきくくすては物々  
くくくくく神々々々々々  
誰をも又ぬきくくくく月  
えくくくくく山 暮の 志  
の克く丹かくおろくく秋のく  
くくくくくくくくく 事  
みぬくくく生るるわがくく色り

翁 店 翁 店 翁 店 翁 店 翁

物子(き)を(や)と(ま)する(天)目  
 花(ら)る(ら)ら(八)世(山)を(ま)つ(ま)る  
 夜(ら)れ(う)る(黒)谷(の) 尾

多(難)境(と)人(の)心(を)作(谷)泊  
 苗(の)常(を)舟(子)多(け)こ(む  
 新(風)子(む)ふ(念)願(を)吹(ま)す  
 大(子)の(肉)け(け)る(生)り(の)  
 さ(く)や(ふ)く(暖)屋(中)の(月)の(秋)  
 今(の)ま(り)こ(ころ)る(縁)多(の)事  
 耕(作)の(り)こ(ころ)る(初)所(り)し

巨(腐)味(あ)ふ(竹)徳(海)花  
 尾(馬)の(跡)ら(う)蒼(を)ま(ま)は(け)る  
 面(の)海(り)を(ま)け(り)る(り)る  
 能(孫)の(り)ら(う)苦(一)む(境)の(所)  
 蒼(を)ま(ま)上(り)門(子)陰(け)る  
 切(麦)の(海)ら(う)ら(う)く(味)れ(あ)ふ  
 お(松)の(ま)は(海)の(骨)月  
 今(の)ま(り)こ(ころ)る(初)の(り)る(り)る  
 神(子)の(ま)る(う)る(家)女(の) 意  
 咲(ち)る(二)腰(ら)る(ま)る(人)  
 打(ら)る(り)る(五)郎(志)月(初)

牛流す村のさくらやま月雨  
青葉吹ち梅檀の花  
一枚のむらぎの金宿の影ひて  
柄も小虎の古木結き  
有影の苞の生海龍のつら  
境初めは八田の中は花  
家（ハ）あよ竹原の官  
お斎ハ月より十五を  
秋と良と終る空を詠る  
鳥（ハ）野のさやう末の  
抱ゆし松葉のつらさ

飄行  
吉未  
菊  
惟楚  
支草  
支考  
所末  
野明  
野

砂小人（ハ）魚さくら  
雨乞のさくら（ハ）花  
彷彿を（ハ）根葉の  
鶴糸（ハ）尾のさくら  
春（ハ）さくら（ハ）浮世  
是（ハ）さくら（ハ）花  
半（ハ）さくら（ハ）花  
川舟の濁り（ハ）花  
堤（ハ）さくら（ハ）花  
春（ハ）さくら（ハ）花  
系（ハ）さくら（ハ）花  
此（ハ）さくら（ハ）花

菊  
学  
然  
竹  
末  
学  
菊  
野  
末  
竹  
末  
野  
末  
竹  
末

梅子 杖きす 富の香連心  
 ころ 薄工ゆふらの飛口亭くそ  
 ころころ ちかきころころ ちかき  
 朝日有起し けろころころ 六眼  
 分ふぬし 急を志すころ  
 道生ふおし ちけつて 御足根  
 加減をせ ころ 湯漬の 桶  
 ちかき ちかき ちかき 入て  
 何とけし ころ ちかき ちかき  
 吸物 ちかき ちかき ちかき  
 肥後 ちかき ちかき ちかき  
 い ちかき ちかき ちかき

熊 菊 末 竹 明 然 菊 末 竹 明 然 菊

日ととて ころ ちかき ころ ちかき ころ ちかき

二月廿三日

貴ととて ころ ちかき ころ ちかき ころ ちかき  
 礼志 ころ ちかき ころ ちかき ころ ちかき  
 善父 入の ちかき ちかき ちかき ちかき  
 又 時 ころ ちかき ころ ちかき ころ ちかき  
 火 燒 ころ ちかき ころ ちかき ころ ちかき  
 産 ころ ちかき ころ ちかき ころ ちかき  
 旅 人 ころ ちかき ころ ちかき ころ ちかき  
 春 ころ ちかき ころ ちかき ころ ちかき  
 末 ころ ちかき ころ ちかき ころ ちかき

浪 化  
 末 化 末 化 末 化

小庭しき並み珠のうゝ河  
 謂分のちよりしと起る底をり  
 梅咲そえして花さやうけ  
 手中を松の肉より料理喰  
 伊東の懐のいそしき素  
 上紺の木路合羽をか指さ  
 湯屋のちささくハ八さうじ  
 君月の控箱五子可く一合  
 一分してとあふ梨めきれまの  
 玉味塩の候徳さうじの秋の風  
 不足ぬちをそぞろ持すの  
 右の子の押い次第の流し本

本、化、末、翁、化、末、翁、本

点りけしやのあ役の又  
 此のちをさきで通る船の鯨  
 青田うわうて又之の風  
 雪めある石を安さるゆ水場  
 陸仕をさきして下り合とよ  
 月々々ふねの塔梅を星く尺の  
 柳葉柳ハよほと霧 展  
 志のふりも踊らむと心をもて  
 赤くうくく可き吉幸の傍家  
 ちんちんハ望とゆきしう  
 舟のちぬんちむら子横を  
 唇くさるねく花の咲くゆれ

本、翁、化、末、化、末、翁、本

四五人通る傳長宮あり  
新色河の子供の習古能  
いつともまきし志るよきの中

化 菊 末

紫かくれをさけかて瓜の美りれ  
母ねり字のつらさの  
おけお持手旅の人と唄  
せとお供のゆき心とぶら  
おまけの初めさうさう月の入  
火のさうさうと燃し良き  
新にをまきさひのほろり華清宗

吉来  
浪化 菊  
之道 文草  
支考 惟然

兄弟とも見をゆりむる  
切きて島見さす丹波山  
そらりしおきき物  
あかハ鯨のさぬささう  
あさけけし新燈のさや  
らくさく風を吹て戸を敲  
こさくこと我く素の紫  
砂川の海くふりつ夕月夜  
あか志とれとも軒あきつく  
百もふ花の木さけの店屋物  
そまふね能く西を足さす  
此ちす標農くあし古寺のま

野童 野明 末  
考 然 産 明 是 末  
字 子



獵場のさびやあつらふ  
 新の肉息まうるをいささ  
 餅つておけけし汁飲もう  
 羽子板のまきし一頁の  
 借上りよききあつらぬ  
 糸小紋の絹の十帖のすん  
 子舟さらさらや秋ハ草  
 比夕月をぬきと山  
 船々々けのつ子か  
 角守つて舟のあつら  
 あつらふ未くる市の小  
 此ころの代物まきし  
 是 然 堂 無 有 学 末 是 明 堂 然 有

聲と響けあつら  
 お局の里いへハ  
 海とこまよつ物のか  
 花の色はまきし  
 々々れ一々まきし  
 是 然 堂 無 有 学 末 是 明 堂 然 有

関五月廿二日  
 柳骨解に  
 万引  
 村  
 帰  
 月  
 是 然 堂 無 有 学 末 是 明 堂 然 有

五十八

小い〜うれて砂子思つく 惟然  
 上を〜さう〜波ささる小堂多う  
 手桶も入るお遊りの法 翁  
 飛も念ハつたの〜く〜  
 大工の形作り踏をう法 翁  
 牛糞のよ返掛る唐表の先 然  
 位り〜を〜ら〜酢仕利をや 翁  
 海お〜と〜さ〜雨の志〜し〜と 翁  
 趣〜(や〜さ〜)〜さ〜洗足 翁  
 打鯨を焼と乾〜角方子 翁  
 とろ〜と〜さ〜櫓の木力森 然  
 月花子ら〜さ〜門を〜の〜入〜 翁

業おるす岫の上 海板  
 陽を〜お〜守〜付〜つ〜器志の供 子  
 新〜子〜のかさ〜ゆ〜と〜て〜来〜つ 翁  
 氏口〜の〜さ〜守〜さ〜と〜ゆ〜か〜して 翁  
 運〜心〜を〜さ〜ゆ〜め〜の〜不〜端 翁  
 へ〜す〜さ〜の〜一〜た〜ん〜庭〜の〜海〜〜 翁  
 法お〜ハ〜志〜んと〜次〜の〜田 翁  
 妙〜心〜の〜細〜を〜籠〜の〜か〜す〜音 翁  
 陸〜の〜ゆ〜屋〜ゆ〜〜吹〜き〜 翁  
 葬礼の法〜して〜葬〜ま〜は〜花〜心 翁  
 子ぬ〜ら〜い〜祝〜し〜お〜る〜す〜牛〜の〜荷 翁  
 川〜い〜ら〜渡〜し〜さ〜よ〜と〜ゆ〜子 翁

田上の虎  
 正月とやとひまの甘日色  
 持つけし末のときの名代  
 咲木の行はる砂子塔松魚  
 ひえんをくけてお像さやく  
 白粉をぬれとも地尾心顔  
 紋者撰松の衣のよふよふ

子  
 堂  
 末  
 然  
 子  
 考  
 末

夕やや菱子時をさるる中強  
 助をふさく数の一の病  
 ちうこと海際と沙魚の法き立て

有  
 翁  
 惟  
 然

丁のちさくハハれ多人  
 一葉の珠て海よりこれの月  
 解子種養子庵の地多ふ  
 松茸と小信村ねハチウれハ  
 かしゆうまも人子か  
 甚ふの法きと致屋の口の  
 松の張老子子尿瓶さし  
 子のいさひのいさひも言伝唱ふ  
 くの百子いく度志く  
 先ふくしと川もさふまの  
 米の味あふはさとの稿  
 月影と名流の流ふた

野  
 明  
 翁  
 然  
 翁  
 然  
 翁  
 然  
 翁  
 然  
 翁  
 然

毛戸のたぐふる初瀬の映隆  
 花の多し等々娘精のいくちきり  
 去留のまじり草多ぬの所  
 湯谷の田舎役者の荷の通う  
 伊勢の吐く子料理先より  
 栞の本をすらすと風の写さる  
 尾と結ぶ娘を空ろほく  
 俵とくまをうたひの成り宵の月  
 きりくすかきやや糖の中  
 秋とくまやいろはをくまより  
 合点のゆゑぬやのかし木  
 振るとをたつた文とる浮花を

夷始 松星 如行 露川 明 然 弱 明 然 菊 明

木子抱付て取く管 庭  
 作のしりあきて多ね華徳  
 の屋の島々上田の如木  
 のの秋の明方きえる筆の秀  
 荒さうしにかんこに  
 遠くれぬハみ濃の中りてさ吹  
 此有末より 終る 櫻 炭  
 昔くく花のりと思向の 陣  
 くるハぬ春とすまらさ 雪

川 始 星 行 川 星 始 川  
 執事 行 始 星 行 川 星 始 川

みる所や夢の境もよる友と交

有有

西日もおきく藪のふた  
 ひろくと海濱の館の法とて  
 丁のちとてハなれも人し  
 一葉の踏て海をよるれの月  
 柳の結着て危の地もあふ  
 松茸も小僧おねハちとて  
 ほこえうの生を人よとて  
 甚ふのほきまの館の口ひて  
 杯の馳走も麻瓶きむす  
 木のひとていふてハなれも  
 くのちとていふてハなれも  
 めきしと川をよるれの月

霜 野明  
 然 然 然 然 然  
 然 然 然 然 然

朱の味ふよ此里の綿  
 月影のほしとこの海をよる  
 岩のたくとち海濱の入お  
 花のちとていふてハなれも  
 太ふねとていふてハなれも  
 陽のたくとち海濱の入お  
 竹のちとていふてハなれも  
 松の木をすくとて風の吹よる  
 尾のちとていふてハなれも  
 うとていふてハなれも  
 豆腐志しとていふてハなれも

霜 霜 霜 霜 霜  
 然 然 然 然 然  
 来 来 来 来 来

合羽山ふくつて芝原の春  
 野あして陽儀ふもさ崖の  
 所老の役子とぬあ智  
 多ふしとまは入ていふよ  
 松のみとらぬきえしとて  
 心き心とつてさの赤坂  
 子所しきのふの平年のる  
 夢おしとらぬお相折の  
 難波なる花の新河よる  
 み子ととつて物山次  
 之道  
 明  
 末  
 然  
 本  
 明  
 然  
 末  
 明  
 然  
 末  
 明

夏の夜やふりての冷物  
 高きとつてさの赤坂  
 夢おしとらぬお相折の  
 難波なる花の新河よる  
 み子ととつて物山次  
 之道  
 明  
 末  
 然  
 本  
 明  
 然  
 末  
 明

持佛の鳥千々々さしこむ  
手嘘千々々と舞まじりて  
秋風ささるる所の尾風  
下葉て張山初る月ありけ  
尾張てつきしえの月ありけ  
餅みよりののちのちのち  
正月ありてさしこむさし  
去風と舞まじりてさしこ  
舞まじりてさしこむさし  
白き月の対る山はさしこむ  
尾張を棒千々々と舞まじり

才翠弱者然才翠弱者然才翠

さしこむさしこむさしこむ  
おわてさしこむさしこむ  
さしこむさしこむさしこむ  
君智の分をさしこむさし  
射付しとさしこむさしこむ  
さしこむさしこむさしこむ  
法はさしこむさしこむさし  
言はさしこむさしこむさし  
今さしこむさしこむさし  
大きにさしこむさしこむ  
さしこむさしこむさしこむ

才翠弱者然才翠弱者然才翠

海くけはなす——高樹の下 方

ゆきと揚の扇や雪の峰 翁

喜葉をらつくと又主の約 安世

流を流す舟を居候に送る 支考

く糸れり家も他は 京 中 空芽

月のあはれは子安し未る 大龍

大方虫のちをそらへ 丹野

かろくさをもよめり秋の雪 牙

直くく呼る人の心 翁

さゆとくと物を思ひ起るを待 在

秋のゆきやう——む海原 考

ゆきとく心も付るまにれ—— 牙

去向の風を吹く 翁

能紀るむす子の居る縁の上 通

まろくは戸の雪叶の末る 路

ま心とめてはゆき中の思もきん 就

らつとよのゆき枝よりははく 考

月をを紀の言をが—— 考

ゆきとけりよや猫さうり 考

石塔きんよとくさくさくち 考

宵とけ伸らる悴雪つらふ 考

こくめんれ仲方の家し不辨 考



中史少いむししてきひ智のり  
縮着しと強をもささしてたうあ  
名はの所此を付もた  
的方の解とあつて平素も稿  
こゝへいふことつてあつた  
萱草はまつたつと解林の雨  
のり付して訪者上ま  
女房と共さうりぬ先怪し  
尾たれ武士の二番とえと  
去も師の感竹ハ杖子代と  
因カテあつてさやふ不二  
故のたすハさうのてあつたの

種就翁葉文通考就就文翁

酒端と名を付て看る  
病ぬいて結白とある花  
雪ちと白とあるとん

五通就

六月廿二

翁

秋らうふらうのあや四尋  
志とらうり所つたしこの  
月残つたあうの大新歩  
起つと解つてつてつ  
海すつてあつてあつたの  
まのりふいて解つて  
夕飯をくつて味ハ解も待

木節 悟然 支考 翁 考

何の美ともなきぬ大きき  
右して虫のかゝる喧嘩さ  
うらしく暮のちのひく痛  
佛の檀の味子子月さし  
梁くくろ此落る秋風  
八節のれハそこし紅花  
舟荷の結の対分をう  
西美徳ハ地修手れの如く  
持よりすする醫者の子  
結うけく脚踵くぬ花の  
之袋後てあす昼の陽片  
手れ子らひきふ取つ供を

然翁 然翁 然翁 然翁 然翁 然翁 然翁 然翁

かくしうあういんまふ  
約枝の上く志ろふ歌はさ  
夏子花苞をとりのと置  
半若部ハ四面をもてや  
竹の根をけりまのさし  
志くくと多ハ枇杷と花の  
時とあけあけするはこく  
言ハこれそくしてそく火  
至るすれく物さしす  
髪結て霜とあつ日の物  
木子十くく林をく  
満化子中結志ゆけて

然翁 然翁 然翁 然翁 然翁 然翁 然翁 然翁

桶と鹽とあつてき編  
扱すもさう行し猫の遊りき  
そり物をかふる掃除の  
花咲ハ茶摘くわる表の山  
清いしに配る赤土の岸

然翁者然

松茸やーしぬ木紫の夜さ付  
秋の夕紅ハ雲し加の中は  
宵の月河原の星を中江に  
くくハきけハ里のうり家  
四五人て集るもはる能く走

翁  
元代  
支考  
雪芝  
猿誰

いきりし約千鶴をまうの  
このちを此よりすくはるる  
屏風とて挿居りこ  
らんし上州米の赤さたる  
まら子のちをまらりの命さ  
嵐ゆくおとんの上の赤味さ  
風干多てさるハちの  
いそしき体もくは木紫  
三年とてと嫁り子のち  
難の志りぶハ人年とて  
きささくさくぬぬつと  
初むの頃古竹弦也

望翠  
惟然  
卓袋  
代  
者  
芝  
鯉  
翠  
翁  
袋  
萩子  
然

是と、と、ぬ月、の、結、十、  
け、く、く、と、鏡、子、く、小、さ、の、花、を、た、れ、て  
麻、の、苦、へ、と、豆、鼓、を、な、め、り  
手、切、の、ち、い、ま、の、島、手、角、を、入、  
居、風、の、な、り、の、ゆ、め、が、滅、く、と、な  
二、三、本、木、伐、れ、た、か、ん、く、く、と  
お、宿、の、燈、籠、を、華、の、音、小、原  
破、れ、て、枕、の、こ、も、な、り、の、弱  
花、ま、い、り、に、と、し、け、し、の、仙  
味、味、を、い、の、音、を、く、く、と、つ、こ、して  
木、線、を、な、げ、り、に、い、く、と、し、る、く  
そ、の、ち、が、家、の、袖、も、搦、れ、る、

代、袋、其、程、菊、老、子、性、老、袋、代、然

は、か、ま、え、く、け、り、て、ゆ、り、あ、る、案  
叶、秋、ハ、噴、の、も、れ、を、花、の、て  
信、と、倍、と、い、の、な、り、の、ま、る、く、こ  
呵、の、は、い、と、く、焚、竹、の、か、ん、の、い、  
其、ま、り、入、り、る、屋、を、か、け、り、  
花、を、い、く、は、吐、出、の、い、く、と、吹、  
ま、り、の、な、り、の、う、ち、の、ま、り、の、め、

子、菊、翠、老、性、代

七月廿八日 猿雄亭 在席  
お、れ、し、こ、も、る、海、ゆ、り、の、あ、り、の  
都、の、か、く、と、あ、く、と、栗、の、種  
初、月、初、智、子、漸、か、つ、は、ま、り、

配、力



干かゝるひの志免る言月  
 社主の沙汰を拵と上りて  
 志免る岸の体心代士  
 衣免る松すくろり新し  
 か衣一とひの屏の糸お  
 耳儒をそりてて枝のさき  
 行義の急な屏の六尺  
 大少のれ指引所けの花の信  
 宋の禪子のくも心二 月

白力翠桂芬菊  
 信 翠 信 翠 信 翠

法衣と筆をもりて板衣也  
 望望年

牛のくろく色を神阿のく次  
 初月之難き女一虎を振る  
 牛丸ハすくはく豆腐受きり  
 大ハの通るくくくく狭小航  
 阿老の島子編笠と髪は  
 疲あうくく心ひくく川おも  
 世中一牛を魂をととやの  
 嫁入の妻をく知やれ門まを  
 杖と子履を新しして至  
 一信年かきまをる存取新  
 龜釣あうか月くくく海  
 大さのくくくて田子も島くも

惟然 去等 雪定 猿雄 一箱 車袋 九節 定 翠 然 鱈 箱

蒼き鳥をさくみ雛子の旅  
 立ちゆくみちしをく尺事の端  
 珠持まよし祖母の位 了  
 吉ぬり花の木くけの一輝  
 何れもやうなきふまきの心風  
 龍霧屋のひらくまけのあまを 焚  
 ちくひのそらふまをわめく信  
 舟板の丸手母をいふまを度い  
 くとくすれハ居風るのまつ  
 持槍の一百座子さうくく  
 安房つづくハこれ作ハハ  
 香月の入しれくは花月市

袋 芳 翠 芝 菊 袋 芝 雛 芳 菊 雛 袋

翠の香しらのゆるふ小葉 雛  
 百のゆれハ又尺くくある雛の持槍  
 とも子手より色板の 秋  
 在のゆきまけし 満したると 智  
 行る時回し 取痛止し  
 引きてるまよしして玉花の門  
 ひとくくくつりえふ古舟  
 ちくくくと燈籠とけり思のかけ  
 いちのくさくさぬつくお風  
 さハくと葉の信する大子先  
 柳くちゆしつふ子の若松

袋 翠 芝 雛 芳 芝 袋 菊 雛 芳 菊 雛 袋

雨の垣子給きしふる秋空に  
 紺着ふりく子尺さるるさの能  
 夕月の笑了松ハ宮子あま  
 へす柿いろと吹了露 隙  
 夕もそそえぬ二人走しつ互以花  
 こみらくけ至言のゆけふの  
 蝶萱を同利のうらむに付て  
 物て号き門の解 け  
 大木の梢ハ枝のらむ志 じ  
 叶くし麦印してこくう 儘物  
 山吹くつひ春し来て礼配 じ  
 雪 花  
 霜  
 去芳  
 風衣  
 玄布  
 女具鉢  
 弱  
 麦  
 芳  
 露

一里りてと宿をととる 旅  
 掛物の布袋の息子月さして  
 百の葉くまきくす 宿  
 秋風の雨ふるくしと川のよ  
 かしら海ハ舟を先揚る じ  
 美濃山ハ駒ふれ花の吹掛ひ  
 ともくするぬく喜の暇 礼  
 取ふたの西に生くる切目標  
 阿ふれくぬきく向のく 露  
 のうれぬやよそくくハ来ぬきの葉  
 柴焚うけくおくふくく 葉  
 雪竹の杖のふくくく 葉  
 宿 芳 麦 花 霜 去芳 風衣 玄布 女具鉢 弱 麦 芳 露



山は遠きより中をきて  
芳のよきものを尺人の香煙花  
花のうけやうに掃と先  
中ふあれや有るはうの人と  
香煙のいれをかこつ中極  
よひきるはうに極はうけ  
中極のするあまふはうに  
至

申 其 芳 香 極 中 至

松風より新風をすらす初雪が  
月よりさかしく石垣の上  
河の門おひくも麻の飛らえ

支考  
藤 極 中 至

是れハ俗名の種を引する  
せりともおかしきうつらうと  
この山よりけむり 中  
麻あふる草履の履ハきれうと  
床て天をさそそと刺  
まひす種行の終もまひ提  
空啼の中をもそそ引のけ  
仕合と夫楊の舟ものうあん  
あふけと餅のあふれうつ  
せふ(と)は子もそそ引は  
大工尾根屋の隅の隅  
月のあふけとけぬ

香 煙 花 中 極 至 申 其 芳 香 極 中 至

向の海は昔白ゆきやう  
 きはまると玉草しては回し  
 親とふ字をいしゆく秋  
 月影を又く之を責ふ仙  
 かうと藤巻の信はひや  
 咲花を毎季咲く春をう  
 跡寺をうけてはまゝ椽樹  
 孝と精のけしめの鏡を打く  
 肉をのりかきこ子能くこれの  
 是場の門のさし入るはまゝ  
 一里の舟の後をすまふ  
 山は丸密柑の色の黄を本て

考 袋 翠 鏡 紫 紫 考 考 考 考 考 考 考

白あれてくくは畑の家  
 母方より多紀て月の物さひ  
 流の流る老生糸の中  
 傍穿の髪を流り入粒の向  
 さくれむしうはつと海は志むし  
 小倉とハむくひ命をのこの身  
 せんとの風子人死つ所  
 多きまふふはちれ遊ふて  
 たくけえ路のまをり  
 潮は命はすまふる為習張  
 か滅の業走りまるとの心  
 潰滅をまうしてまればま

考 袋 翠 鏡 紫 紫 考 考 考 考 考 考 考

こぼれて生る 柀のむけー  
 約々の葉の陽たくも尾の業  
 飼ハ次中一牛の信やつく  
 枯もさすふささくもあふ楠の枝  
 月尺のいりも造化せりる  
 智もゆりしとす秋の風  
 候の小家をもさるきりー  
 懐平のあしーしきりしけ状  
 いそふの齊と白豆鷹母は  
 雪陰の巻よりぬく花の枝  
 根をつゝいさくさすの明

袋 籠 袋 然 翠 考 袋 籠 袋

菘子のまれさるおのねあが  
 水かき池の中よりそりて  
 藤外まじり茶をいさく  
 難くゆくるとやくし雪の月  
 通りのあさきり見垂立つ秋  
 冬は家一帯して並みる籠の魚  
 屋の桐のまきも本しりり  
 聲のまじりし物清く  
 中ふよるけ状の吉友  
 菊のめいはいちやく振るれ

沽園 翁 支考 愷然 考 翁 然 考 翁 然 考 翁

山とく洞朽くくききき  
寺ありぬき葉の枯の概柳  
山子門あつるの月  
神風ふくけの人のけ也  
ま疎光の演のい  
尺で通る紀三井の笑  
荷持の又ゆきわよふて  
家子一旅を大りくく  
怪味の由まは度屋きく  
喧嘩のきことむきくきく  
大切ぬたりたりきき

然者 然者 然者 然者 然者 然者 然者

きく記きけー中の花  
末の記の床掛ハれ出家  
真の世並ハ近季の他  
酒よりそ着のやま月尺  
赤龍院を施の正  
ささすらぬ娘のるる  
白梅のとうるるの  
多龍を伝ふて起す  
大工は心のねく  
米搗まらふ  
かろふし市れ中を押  
此何く 誕生ハ花の季

然者 然者 然者 然者 然者 然者 然者

野のゆきゆきのまきめけめ

考

松茸や朝子ちうま山の取

惟然

雨子躑躅の志うま秋の

去芳

おもしるく味すうま月曇り

猿雅

すこ入人あふ次の店風を

翁

くこひまうさそりそしし豆

然芳

まのさしこみう夜来し味

然翁

あけぬ熟柿をさかすう積

至て廻りし仔細の味

麻走くふくして古風の味

然雅

肉炙むし来たの酒のとれ際

ちまつま又と痛めつ液をけ

く骨ハ冷つ湯芽生ゆの骨

まめまうあふうとれし一

尺すうけとれぬ魚籠の内

ろとろけつく向う丸の外

躑躅を引とる）蟹の上めり

然翁 然翁 然翁 然翁

行よしの市子とてそあう長谷川

畦止亭あし月を尺竹

外うあしあふあつ月尺丸

秋のゆきゆきに魚籠を

畦止

家のあつた地を新法で築いて  
 川のほとりにはせまきこのむ中へ  
 此の地を築いて土田を築いて  
 板の枝をたれりし色  
 海川に下りて至るを引いて  
 火のほとりにはせまきこのむ中へ  
 善とれハ板のうとんの地  
 坂下して一里ほど来り  
 思ひし子とて来りし牛の糞  
 村のむ尻を子集りて  
 嫁とてハ女とて来りし地  
 大よりうる子此秋の雲やけ

惟然  
 酒壺  
 支考  
 之道  
 青流  
 止  
 然  
 壺  
 有  
 翁  
 流

けの雲を又呼ぶとて新の月  
 すまきの中へ蟬のうらむ  
 菊をきてこれとて遊ぶとて  
 折くはくはぬまの  
 河とては流のまはるの  
 志ししはくはくはくはくはく  
 めりきくと油のまはるの  
 又のうらむとて油のまはるの  
 名号をよとて尺をよとて  
 竹橋のくくはくはくはくはく  
 大根も油のまはるの  
 名はくはくはくはくはくはく

是  
 者  
 壺  
 然  
 翁  
 流  
 壺  
 有  
 翁  
 流

幼き子れて宿き八目子心宿ぬきよ  
 半造化して少り陰子たる  
 幸しくしを計立ふも物くも  
 地も志ぬるほどは向ううき  
 管の比中りうきて一羽 鏡  
 少り所きあひに持さけては  
 船入を所らる位きう三舟の陸  
 栂と藪をも浮山よりたぐ  
 人しのはらと居くぬ花差  
 咀のくつをを結くううり

止 堂 流 弱 毫 流 考 然

菊月廿二日に船に車唐車

秋の程とあそびのしるる味可なり  
 月かたの舟にハ菊葉をうりしを  
 西の山にたれ三たふ居りて  
 走りゆる舟のよくくこくこ  
 菊の舟をわんまに葉ふま性光  
 小袖をわくくを痛く大車  
 使やうもやをくくを折るれ  
 かくても醫者の尺をぬれり  
 栂のまを愈くくの栂きくく  
 家てある舟の 栂  
 比より尾谷りけをきりり  
 うちきりふくハ砂ハんくくま

篇 車唐 洒毫 游力 泐竹 惟然 支考 弱 腐 堂 力 考

花の末ぬねハ初候ウ百の換  
両岸の月めならずき川筋  
火くもーいふ葉沙をさの流り鼻  
七種やししハよろけ際ふた  
足さるれば新緑の苗花やうす  
小松形あ〜ふを秋のまき  
然き力為扇世

所思

此そやけ人きしす秋めくれ  
虫のく〜けの木う〜の草  
月〜いむ葉葉のそむれをの流り  
らいさふ家をむ〜いあ〜む  
遊力  
支考  
泥足  
菊

了季合羽衣を入れて新緑を  
洒〜い〜の〜の〜の〜の〜  
けけぬきさのま〜ま〜か〜  
唄の夜ふ〜ふ〜梅らる  
緑色とまのま〜のゆ〜  
蛭子の歸り跡さき〜  
けい〜の〜有する季ハ候さ  
かくさ〜ふ〜草〜す〜る松風  
け〜〜と山田の端ハま〜  
地蔵の埜の秋ハ〜  
仕りあ〜ふ〜の〜の〜の月  
埜の如の〜と入らむ  
然竹  
扇  
力  
為  
然  
世  
遊  
支  
泥  
菊  
車  
酒  
睡  
惟  
翁  
足  
扇  
考  
竹  
然



お惚々水不醫志の足りさ  
止

園女亭

去る春の月をさして足る庭とぬし  
もさち子あをさめつるお月  
ひやしと朝の片を折まけて  
ゆきとさきう子年はくれは  
小あまの望右の路の懐ひさ  
初をさてふく  
何〜〜〜〜〜  
袖ふさく〜〜〜  
代  
翁  
園女  
楓竹  
渭川  
支考  
惟然  
酒壺  
舍羅

垣こ〜〜〜と盤りぬりよそ  
夢情のうらみはなして火を焚  
ゆ〜ぬと熱の嫁のさえす〜  
ほ〜あ〜の〜子〜初  
と〜れ〜と〜の〜の〜秋  
秋法ひけ〜〜  
か〜れ〜や〜の〜  
ひ〜ん〜の〜め〜さ〜れ〜か〜  
ま〜は〜ハ〜  
か〜代〜  
通〜心〜  
志〜と〜  
翁  
川  
中  
翁  
然  
考  
川  
女  
翁  
何中

河さしと色つくりふきり  
 雲のくしは水うふる風  
 葉受り露のる徳まきも  
 清露は子夜のしむし  
 上はの橋の音なる川の音  
 植田の中を勢のけさつく  
 小かまひこ不所を想しおあぐ  
 行ぬ仕かしのとやる草操  
 有教も命を穢自の夜の長さ  
 杖一本もその娘さし！  
 形勢のそれも神のぬきれて  
 志のらしに娘はしりる

壺 女 翁 女 翁 女 翁 女 壺  
 川 翁 中 外 壺 女 翁 外 壺

餅ちきうの環めはしりの娘りさ  
 妻ぬき冬の積りくさあは  
 洞の水のほそまふくまきり  
 物のさし木さしし 伸り

壺 女 翁 女 壺  
 然 壺 女 翁

百高平枝の木下ういのそ  
 第しを杖子吹ふ山と家  
 隙うし鏡ひと影の跡うれて  
 柳くましけよしひのそ  
 田棹し作しし娘の節起

翁 浪化 言来 如舟 翁

業種あやかしおのけや夕涼し  
出陣  
帯つけゆく空陽あめ花  
翁

のあつりいさ歌うえの戸はうれ  
去芳  
たしけ境よりひる  
松籠

清きわら海のおそよ秋立て  
翁  
またれりうのきり秋なり  
翁

又あわしうのぬをうき家のあめ  
松籠  
松籠こもつ山の中へん  
翁

杉しや宙片々さけり  
雪は  
松出  
翁

秋風や吹れて希  
酒  
伏して走りけり  
松籠  
驚くはと新風の里をささく  
翁

年歴不知  
松松すすく山あけさるる  
吉本  
誰おもし  
許六  
白くし  
翁  
長心羽おと四  
常良  
吹されてはハ踊の月さるる  
十那

松千代花 きのほるさけり  
いり 桐千代花をきよめさるる  
阿のまきとみり 八のけり  
非のまきとみり 題心をゆきて  
天言くれと地言くはらん

何れく染吹風とゆきれと  
白のまきとみり 桐千代花  
松風 菊

いりまきとみり 桐千代花  
いりまきとみり 桐千代花  
いりまきとみり 桐千代花  
いりまきとみり 桐千代花

かれ果てしきくふ 髪かほり  
花毛つふまてきくけり

急山やゆりしゆらや山  
可上り 酸さくえり

青の可きかきあふ山  
芽あけしゆら小男麻の角

笠をかきしゆら  
炭くえしゆら小信

冬のきぬこのゆきハはく  
 世のくみいさこ位の高きゆれ  
 くふさみはくくくく  
 尾のくくくくくみぬり  
 鹿のくく火くくくく  
 くぬの百玉のお線のおりき  
 けくくくくくくく  
 二河原く西く破のきくゆ

板の風は豆がく吹  
 空ふくくくくく  
 小僧ふくくくく  
 新解のくくくく  
 象のくくくく  
 字のくくくく  
 すくくくく  
 けくくくく

後かきしらく梅の裾さく  
 更科の里の破をゆのりり  
 端居くられしゆさみ石竹  
 なるあしきくしと物せ山  
 新つ志しのかひあくもあれ  
 隙かす所くく猫の志白  
 人しの中を火燈もよれ合  
 沙走の夕氣折指く如し

楊子そ後のゆき人つ志  
 石子しと細く小館をすう分て  
 蝶掃のそり大さそあわし  
 向ひの人と中をきりり  
 種つて人とけししけり  
 鈴なきさうお松りもよの降くうり  
 梅もそりし市のゆささる  
 大和路く入りきりり花曇り

心—きののろハかろく 和之  
きのふふたハ梅の恵りく

俳諧一葉集附合之部 終



